

埋塚遺跡2

1991

滋賀県坂田郡

近江町教育委員会

卷首図版



埋塚遺跡第5トレンチ 航空写真

埋塚遺跡 2

1991

滋賀県坂田郡

近江町教育委員会

序

近江町は、豊かな自然環境に恵まれ、その肥沃な土壌の上に今日まで発展して参りました。この度報告いたします「埋塚遺跡」は古墳として周知されてきましたが、今回の調査によって平安時代を中心とした遺跡であることが明らかになりました。

「埋塚遺跡」をはじめ先人の残した数多くの諸遺跡は、近江町の歴史・文化を理解する上で欠くことのできない公共の財産です。これらの貴重な文化財を後世に伝えていくことは現代に生きる我々の責務といえます。

この報告が地域史研究や埋蔵文化財保護への理解と認識を深めるために幾分でも寄与することができれば幸いです。

末筆になりましたが、この調査に御協力いただきました関係諸氏・関係諸期関に厚く御礼申し上げます。

平成3年3月

近江町教育委員会

教育長 木田源三郎

例　　言

1, 本書は、滋賀県坂田郡近江町内における県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財（埋塚遺跡）の発掘調査の報告書である。

2, 発掘調査は平成元年度に実施し、平成2年度に整理調査を実施した。

3, 調査は滋賀県の依頼により、近江町教育委員会が実施した。調査の体制は下記の通りである。

調査主体　近江町教育委員会　　教育長　木田源三郎

調査事務局　近江町教育委員会　社会教育課　　課長　須戸　茂樹

係長　世森　増信

主任　宮崎　幹也

調査補助員　南　孝雄（現・京都市埋蔵文化財研究所）、

中川治美（中京大学学生）、橋本和恵（滋賀大学学生）

作業員　広瀬清左エ門、広瀬長吾、村岡勝次、北居憲治、近藤喜美子
吉居靖子、小原八重子

4, 本書をまとめるにあたって、下記の方々から指導、助言を得た。記して厚く感謝の意を表する次第である。

江谷　寛、古野四郎、粕淵宏昭、高橋克壽、用田政晴、中川通士、田路正幸

中井　均、高居芳美、古川　登、中村健二　　（順不同、敬称略）

5, 発掘調査および整理調査にあたっては下記の団体の協力を得た、記して謝意を表する。

金城測量株式会社（空中写真測量・遺物実測）、有限会社粕淵建設（発掘機械）、東亜工業株式会社（調査器材）、滋賀建機サービス有限会社（調査器材）、有限会社真陽社（報告書）

6, 本書で使用した方位は新平面直角座標系VIによった。また標高はT P（東京湾平均海面高度）を用いた。

7, 本書の執筆・編集は宮崎幹也がおこなった。

目 次

第1章 はじめに	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第3章 調査の経緯	5
第4章 調査の結果	6
(1) 試掘調査の結果	6
(2) 発掘調査の結果	7
第5章 ま と め	32

挿 図 目 次

第1図 埋塚遺跡とその周辺.....	2
第2図 調査トレンチ位置図.....	4
第3図 試掘第28トレンチ出土遺物.....	7
第4図 第5トレンチ遺構全体図.....	8
第5図 S X01遺構平面図.....	9
第6図 S X01出土遺物.....	9
第7図 S D01出土遺物（1）	10
第8図 第5トレンチ地形図.....	10
第9図 S D01出土遺物（2）	11

第10図	S B01遺構平面図	12
第11図	S B02遺構平面図	13
第12図	S B03遺構平面図	14
第13図	S B04遺構平面図	15
第14図	S B05遺構平面図	16
第15図	S B06遺構平面図	17
第16図	S B07遺構平面図	18
第17図	S B08遺構平面図	19
第18図	S K01遺構図	20
第19図	第5トレンチ出土遺物（1）	20
第20図	S B10・S B11遺構平面図	21
第21図	S D02出土遺物	22
第22図	S D03出土遺物	22
第23図	第5トレンチ平面図	23
第24図	第5トレンチ出土遺物（2）	24
第25図	第5トレンチ・第8トレンチ出土遺物	25
第26図	第6トレンチ・第7トレンチ平面図	26
第27図	S X02遺構平面図	27
第28図	第8トレンチ遺構平面図	28
第29図	S X03遺構平面図	29
第30図	S X03出土遺物	29
第31図	第6トレンチ・第8トレンチ出土遺物	30
第32図	石器実測図	31
第33図	埋塚遺跡と斜行条里	33

図版目次

- 図版 1 埋塚遺跡全景
- 図版 2 (上) 調査前現況 (下) 調査風景
- 図版 3 (上) 試掘第28トレンチ (下) 試掘第28トレンチ
- 図版 4 (上) 調査風景 (下) 調査風景
- 図版 5 第5トレンチ空中写真
- 図版 6 (上) SB02 (下) SB01
- 図版 7 (上) SB12 (下) SB06
- 図版 8 (上) SB10 (下) SB10
- 図版 9 (上) 柱穴遺存状況 (下) 柱穴遺存状況
- 図版 10 (上) SK01 (下) SX01
- 図版 11 (上) 第5トレンチ (下) SB06
- 図版 12 (上) 第8トレンチ (下) SX03
- 図版 13 出土遺物
- 図版 14 出土遺物
- 図版 15 出土遺物
- 図版 16 出土遺物
- 図版 17 出土遺物
- 図版 18 出土遺物

第1章 はじめに

埋塚遺跡は「うめづかいせき」と呼称し、滋賀県坂田郡近江町顏戸に所在する。近江町は琵琶湖の北東部に所在し、JR東海道新幹線「米原駅」の北東側に拡がる小規模な町ながら、古代よりの交通の要衝として栄え数多くの遺跡の存在が知られている。

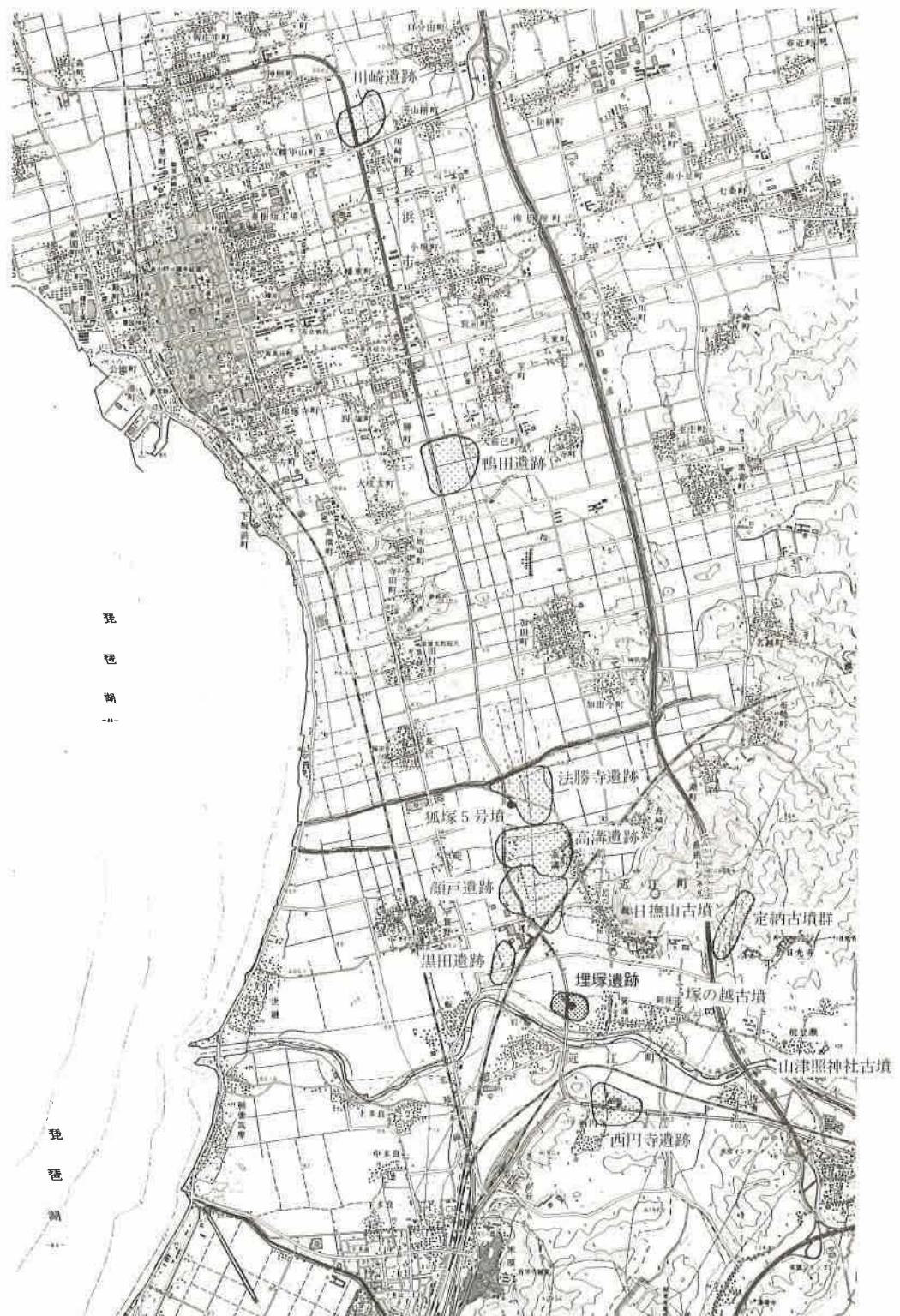
ここに報告する埋塚遺跡は、町の中心にある集落「顏戸」の南方水田地帯に所在しており、一級河川「天の川」の右岸に位置し、100基近くの方形周溝墓が発見された法勝寺遺跡を北方4kmに控え、円形低墳丘墓を含む環濠集落西円寺遺跡を南方1kmに隣接させている。埋塚遺跡は古くから周知されていた遺跡ではなく、昭和61年度の分布調査時に新たに周知された遺跡であり、周知範囲内の畠地を中心として、須恵器等の遺物の散布が認められ、古墳として周知されてきた。滋賀県の湖北地域の平野部には「つか」と呼ばれ、古墳と周知されながら、発掘調査によって別の性格をもつ遺構であると判明した遺跡が多く分布したり、この埋塚遺跡に対しても古墳と考える向きと、他の性格の遺構を考える向きがあった。また分布調査によって発見された散布遺物中の須恵器には幅広い年代観が認められ、遺跡の性格付けを一層複雑化させていた。

今般、滋賀県農林部による県営ほ場整備（天の川東部地区・新庄箕浦顏戸工区）が実施される中で、切土工事等によって同遺跡の中心部への影響が予測されたため、遺跡の保護策を講じる目的で試掘調査を実施し、さらに発掘調査によって遺跡の実態を明らかにすることとなった。

試掘調査および発掘調査は、滋賀県教育委員会の依頼に基づき近江町教育委員会が実施した。現地調査は平成元年6月28日より8月18日までの期間で実施し、平成3年3月30日まで整理調査を実施した。

また、埋塚遺跡については同年度に灌漑排水整備事業に伴う第1次発掘調査を実施しており、ここに報告する当該調査は第2次調査にあたる。既に第1次調査の調査箇所については第1トレーニチから第4トレーニチとされており、当該調査の実施箇所を第5トレーニチから第8トレーニチとした。

第5トレーニチは、古墳と周知される箇所を対象としており、周辺の水田より約50cm程高まった上部の平坦な畠地を呈していた。また第6トレーニチ・第7トレーニチ・第8トレーニチは、第5トレーニチの北西部と北東部に位置し、旧現況は平坦な水田を呈していた。また第1次調査は第5トレーニチの北60m地点で実施されており、同遺跡の北端に該当することが明らかとなっている。



第1図 埋塚遺跡とその周辺 (S=1:50,000)

第2章 遺跡の位置と環境

近江町にはアルファベットのL字形に平野部が拡がり、このうち北西部は琵琶湖に隣接しており、北隣する長浜市内の平野部へと続き、湖北地域の条里施行地帯の一部となる。また南西部は、一級河川「天野川」を隔て米原町と隣接するが、同河川の旧河道氾濫源によって条里普及は、統一的なものでなく、乱れた様相を呈している。一方、平野部のL字形に伸びる東方への拡がりは、日撫山丘陵（横山丘陵最南部）の南裾部に拡がり、その中央部を天野川が西流する。天野川の右岸（北部）と左岸（南部）では、現況の水田地割が異なっており、右岸の地割は「斜行地割」を呈している。

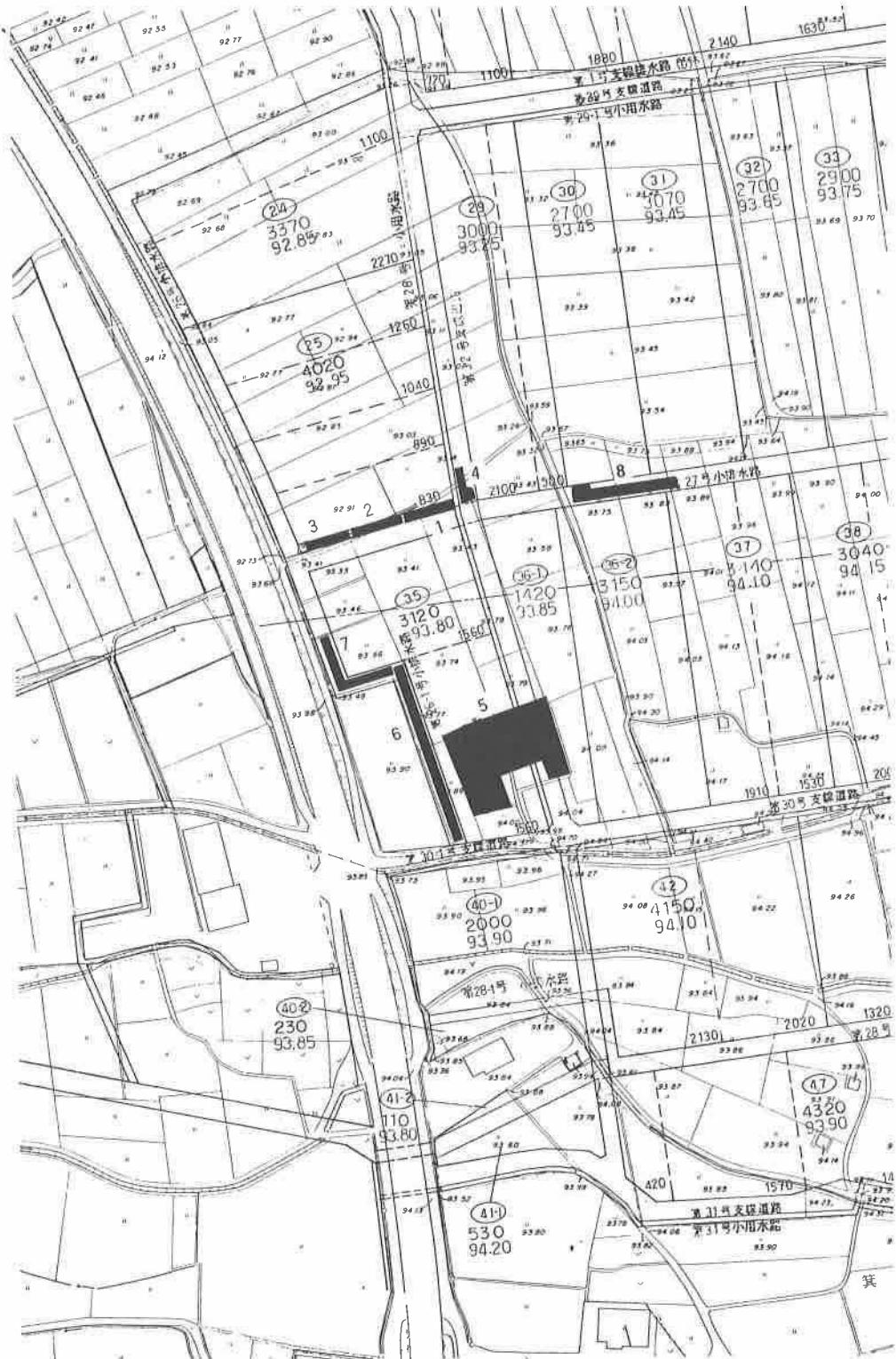
今回調査の対象となった埋塚遺跡は、このL字形平野部の屈折点にあたり、天野川右岸に位置し、西側に拡がる長浜南部平野統一条里と東側に拡がる斜行地割の接続点に該当する。

遺跡の標高は、TP.+94.00m前後を測り、琵琶湖の平均海面（84,371m）より約10m高い位置にあたり、調査地の埋塚遺跡より西方約2.5kmの琵琶湖に至るまで、緩やかな傾斜を保ちながら平野の水田地帯が続く。

次に調査地周辺の歴史的環境について説明を加えると、同遺跡の北方約2kmに位置する高溝・顔戸地区には、縄文時代から古墳時代に至る大規模な遺跡密集地帯がある。このなかでも最も古いものは、法勝寺遺跡で出土した縄文早期の土器「高山寺式土器」と狐塚遺跡で出土した石器「有舌尖頭器」であり、縄文時代早期の遺跡として理解されている。これに続く遺跡は高溝遺跡であり、縄文時代前期から晩期に至る豊富な量の遺物出土が報告されている。この他に近年の調査では、埋塚遺跡の東隣500mに位置する浄蓮寺遺跡から縄文時代後期の甕棺が発見され、南隣1kmに位置する西円寺遺跡と北西隣1kmに位置する黒田遺跡からも縄文時代後期・晩期の遺物出土が知られるようになった。

弥生時代から古墳時代にかけては、約90基の方形周溝墓で構成される法勝寺遺跡や、環濠集落顔戸遺跡・西円寺遺跡の存在が知られる。このうち法勝寺遺跡では、3世紀後半に前方後方形周溝墓が出現し、西円寺遺跡では3世紀末葉に円形低墳丘墓が出現する。これらの遺構は、続く古墳時代の墳墓築造に大きく影響を与えている。古墳時代にはいると日撫山丘陵の尾根部に日撫山古墳と定納古墳群が築造される一方で、西円寺3号墓（5世紀末葉の帆立貝形低墳丘墓）など平野部にも低墳丘墓の築造が認められる。

埋塚遺跡を古墳と周知した背景には、このような墳墓立地の状況があり、天野川左岸に立地する米原町大乾古墳群（5世紀末葉の埋没古墳）に類似した古墳の存在が予測されていた。



第2図 調査トレンチ位置図 (S=1:2,000)

第3章 調査の経緯

近江町では平成元年度に大規模な「ほ場整備事業」と「灌漑排水整備事業」が実施され、これらの工事に関連して埋蔵文化財の試掘調査や発掘調査が活発におこなわれた。これらの調査の中には、両事業の性格を併合したものも多く、厳密に二分割することのできないものが多く含まれている。現地調査の時点では、互いの調査区を厳密に区分することができず、共通した調査トレンチの中で実施した。そこで報告に際しては、調査の成果を極力遺跡単位にまとめ、かつ事業の性格ごとに集約できるよう務めた。

県営ほ場整備事業（天の川東部地区・新庄箕浦顔戸工区）に伴って試掘調査された遺跡は、埋塚遺跡・淨蓮寺遺跡・箕浦城遺跡・顔戸遺跡・高溝遺跡・長門寺遺跡・塚の越古墳・稗田遺跡・宮の前遺跡等である。このうち、箕浦城遺跡と淨蓮寺遺跡の南部地区については、近江町教育委員会の試掘調査後、滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会の発掘調査に引き継がれ、城郭関連遺構（箕浦城遺跡）・飛鳥時代集落跡（淨蓮寺遺跡）・縄文時代後期甕棺墓群（淨蓮寺遺跡）等が確認されている。

また埋塚遺跡の一部と、淨蓮寺・顔戸遺跡・高溝遺跡については、併合事業の工事過程から現地調査のトレンチや出土遺物を2分割することができず、灌漑排水整備事業関係調査報告のなかで一括して取り扱ったため、当調査報告の中では取り扱っていない。また、長門寺遺跡・宮の前遺跡・稗田遺跡については試掘調査のみで調査を終了したため、今後の各遺跡調査報告時に補足資料として紹介することとした。

当該の県営ほ場整備関連調査報告では、埋塚遺跡と塚の越古墳についてのみ取り扱っている。なお発掘調査を実施した本事業の各遺跡の調査面積は以下のとおりである。

埋 塚 遺 跡（近江町顔戸地先）	1,400m ²
淨蓮寺遺跡（近江町顔戸地先）	130m ²
宮の前遺跡（近江町能登瀬地先）	50m ²
稗 田 遺 跡（近江町顔戸地先）	300m ²
塚の越古墳（近江町新庄地先）	1,000m ²
高 溝 遺 跡（近江町高溝地先）	300m ²
顔 戸 遺 跡（近江町顔戸地先）	620m ²

平成元年度に実施した発掘調査および整理調査は、平成元年6月28日に開始し、平成2年3月31日に終了した。また平成2年度に実施した整理調査は、平成2年4月9日に開始し、平成3年3月30日に終了した。

第4章 調査の結果

(1) 試掘調査の結果

埋塚遺跡に関連して発掘調査された箇所は、第2図に示された第5トレンチから第8トレンチである。第5トレンチの調査前現況は畑地で、周辺の水田より約60cm程高まっているものの、上面が平坦であり「埋塚」の名前が示す塚の様相とはかけ離れたものであった。第5トレンチは、この畑地を水田化するための切土工事が原因であり、塚の実態を明らかにすることが、最初の目的となった。また第6トレンチから第8トレンチは、排水路工事箇所を対象にして実施した。

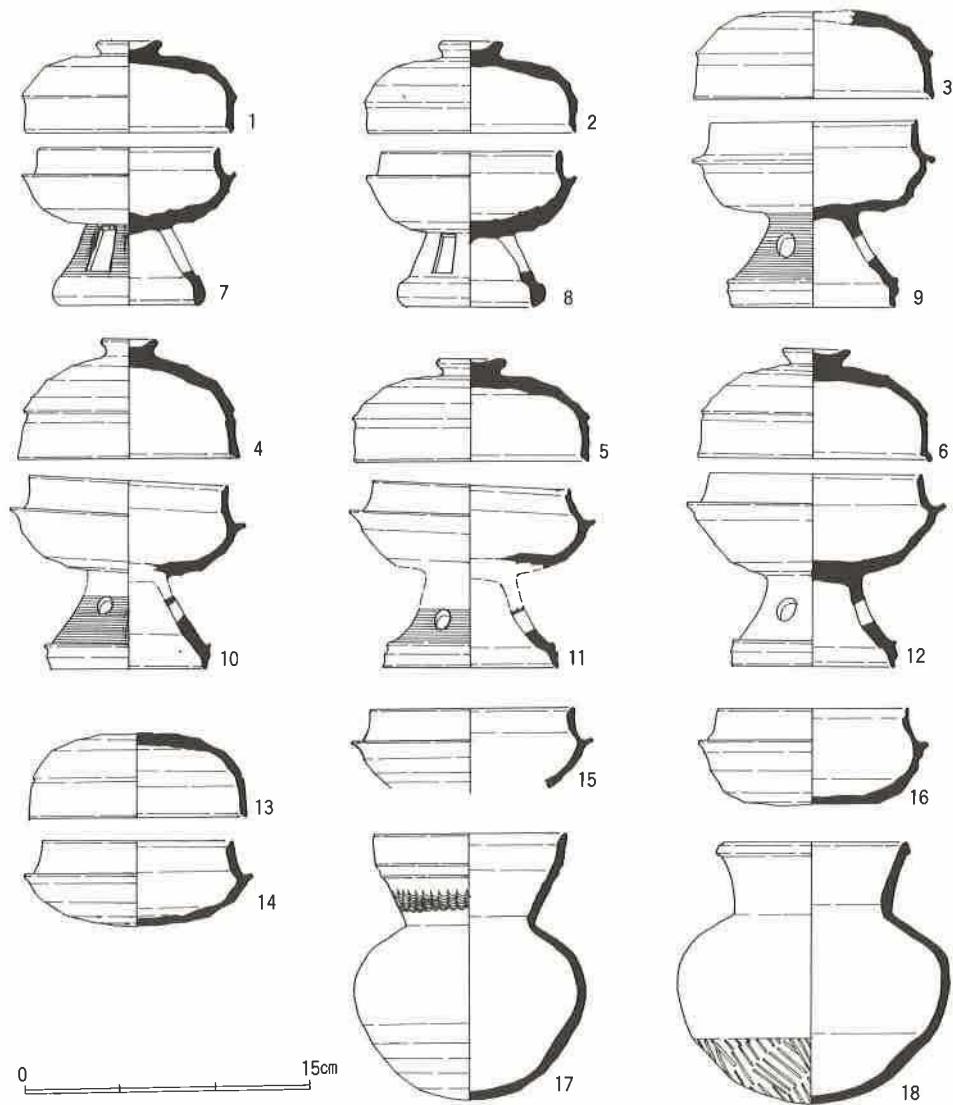
発掘調査に先行して実施された試掘調査では、畑作行為のため切土箇所に充分な掘削ができず、畑地に遺構の存在することだけが確認され、それが塚に関連するものか否か判定されなかつた。しかしながら、畑地の周辺に設定した試掘調査トレンチ（試掘第28トレンチ）から溝状の遺構が検出され、その埋土中から須恵器の蓋杯と有蓋高杯を一括出土した。このことから、古墳と周知されている畑の周囲には、付属する別古墳が埋没していると考えられ、その出土遺物の年代観から5世紀末葉の埋没古墳の存在が推定されるに至つた。

第28号試掘トレンチから出土した土器には、須恵器の蓋杯・有蓋高杯・壺があり、いずれも完形品に近い状態で出土した。第3図に示したもののがそれである。

(1~12) は有蓋高杯のセットである。遺物出土時において、蓋と高杯が組み合わさったものは無く、胎土・焼成・口径から6セットの組み合せを考えた。蓋（1~6）は天井部のヘラ削りが顕著であり、上部中央の凹んだつまみを伴う。また高杯（7~12）には二系統のものがあり、方形の透しを持ち脚端部の丸いもの（7~8）と、円形の透しを持ち脚端部に稜線を持つもの（9~12）に分かれる。

(13) は杯蓋、(14~16) は杯身である。天井部および底部の中央外面に顕著なヘラ削りが認められる。(17・18) は壺である。(17) は口縁部中程に二状の稜線を回らせ、頸部に波状文を施す。底部は丸底で、下半にヘラ削りを残す。(18) は口縁上端部の外面が肥厚している。(17) に比べて幾分肩の張った感じを残している。底部は丸底で、外面に叩きの手法が認められる。

これらの遺物は、古墳の周濠を連想させる溝から出土しており、完形品で構成される一括遺物であり、古墳に供献された遺物である可能性が極めて高い。これらの遺物は5世紀末葉のものと推測され、埋塚遺跡の周囲に併存した小古墳の存在が予測されるに至つた。



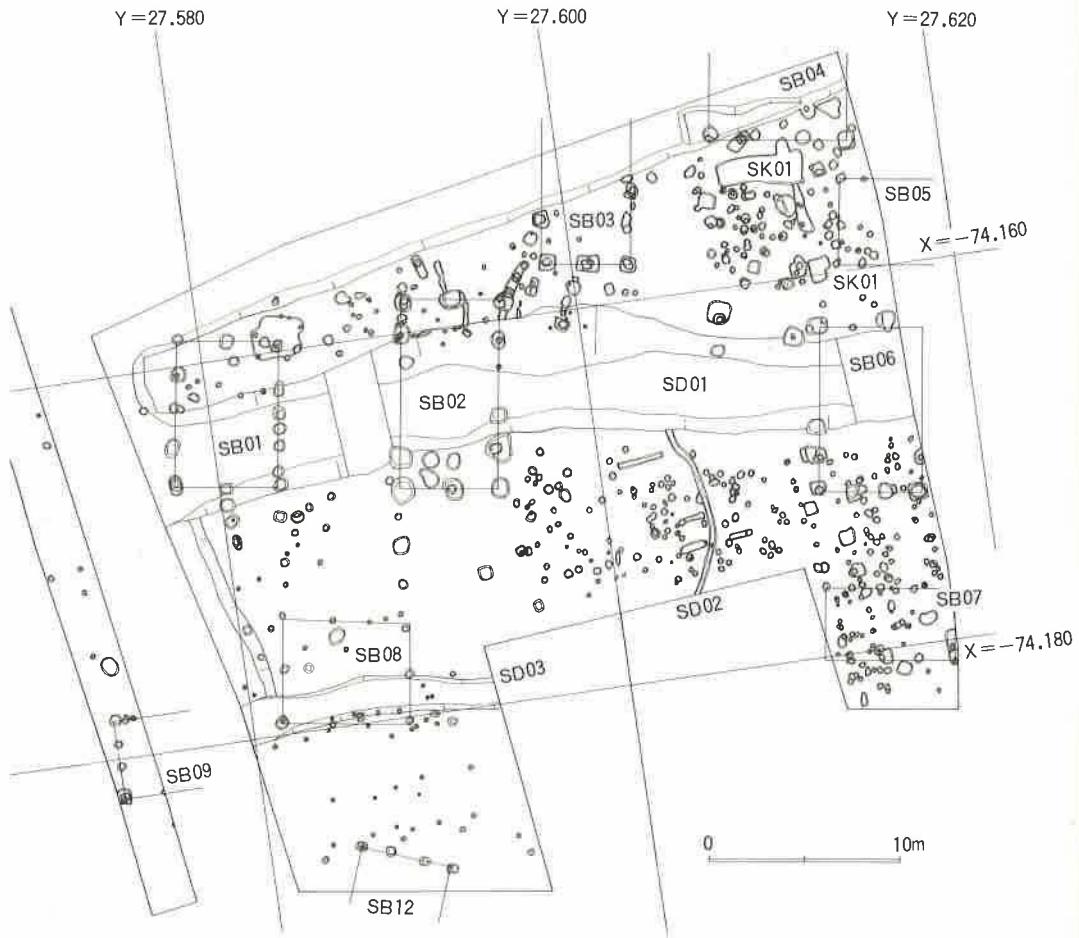
第3図 試掘第28トレンチ出土遺物

(2) 発掘調査の結果

第5トレンチの調査

当初から古墳の可能性を持っていた畠地「埋塚」全域を対象に、堆土の掘り下げを実施した。畠地の土層堆積は約50cmの厚みを測り、暗灰褐色土・暗茶褐色土・灰褐色土で構成され、遺構面を構成する黄褐色シルトに至る。この遺構面は周辺の水田標高よりも約10cm前後高いが、平坦な状態を呈しており、古墳の一部とは判断し難い状態であった。

この遺構面を拡張したものが、第5トレンチ検出遺構である。調査区の中央部では東西



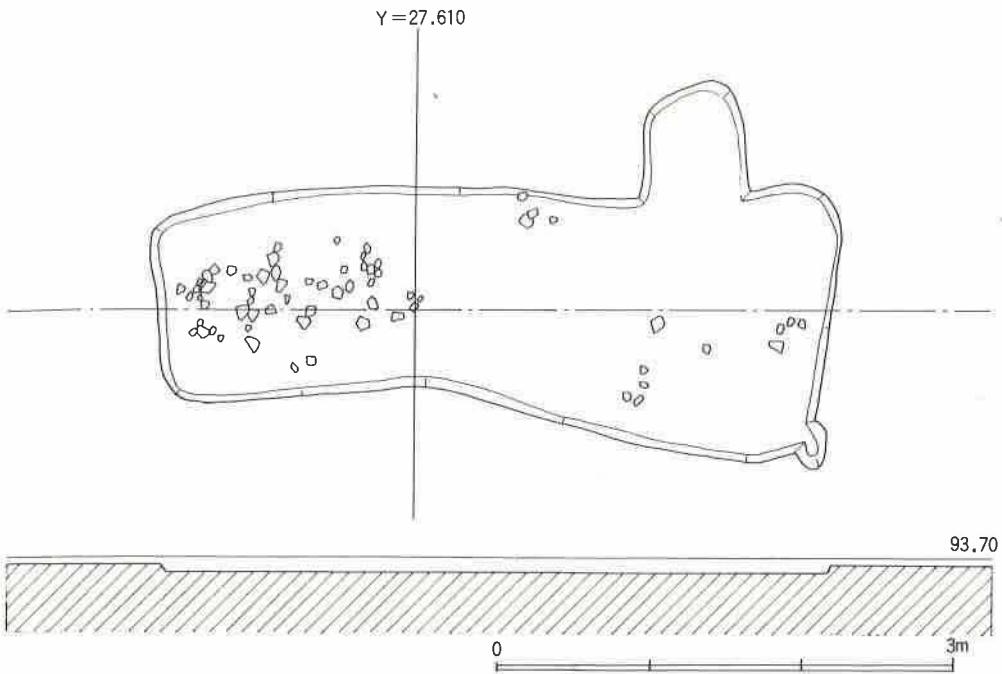
第4図 第5トレンチ遺構全体図

方向に伸びる溝SD01が確認された。この遺構は、幅5~7m・深さ1mを測るもので、検出当初は古墳の周濠の一部に推定されたが、遺構の伸びが幾分蛇行しており、遺構の拡がりから古墳の周濠と確定できる根拠は無く、とりあえず溝状遺構として取り扱った。

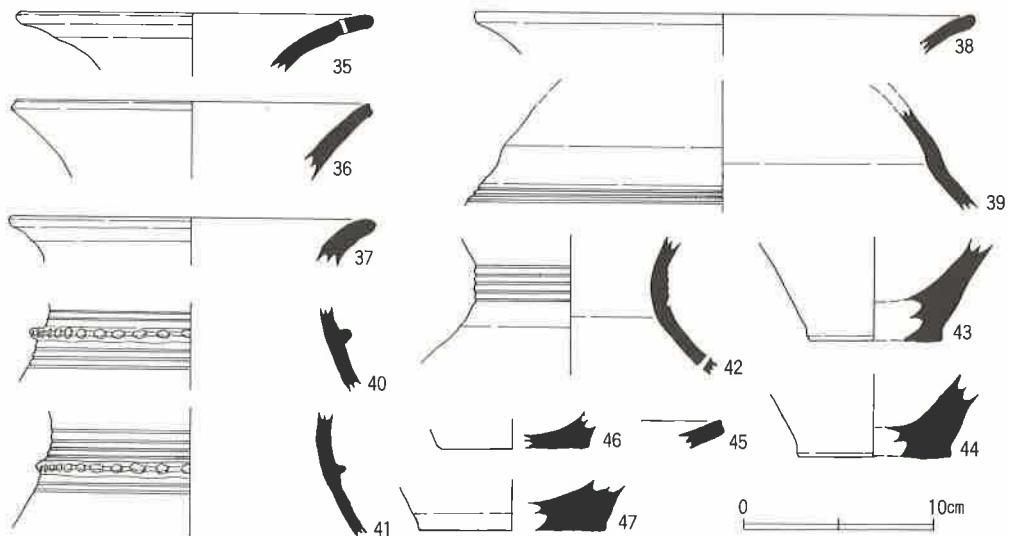
調査当初は、この溝SD01の追及を優先的に実施したが、周辺より大小さまざまな遺構が検出されるに至り、調査の目的主体を周辺遺構の追及に切り替えた。検出された遺構は掘立柱建物・土壙・溝などであり、出土した遺物と合わせ5群のものに分類される。

第1群に該当するのは、検出遺構中で最も古い年代に相当するもので、調査トレンチの北東隅にある土壙SX01である。この遺構は幾分不正形ながら、概して東西に長い長方形プランを呈しており、南北1m50cm・東西4m50cm・深さ10cmを測る。

遺構の内部は暗灰褐色の粘質土で構成されており、西半部に集中して弥生式土器が含まれていた。ここに出土した土器は、壺を中心としたものである。(35~38)は外反する口縁部をもつもので、(35)には口縁部上方に蓋を留めるための穿孔が認められ、(36)は立



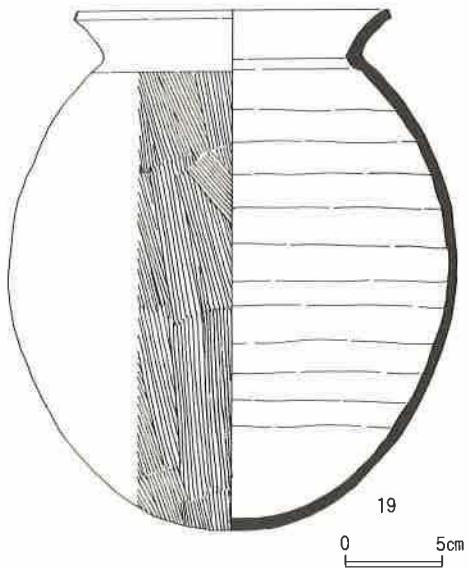
第5図 SX01遺構平面図



第6図 SX01出土遺物

ち上がりのきつい口縁部を持つ。(37)は器壁の厚い土器で、全形は不明である。(38)は口径の大きな壺である。(40・41)は壺の頸部で、多条沈線文の上に刻み目をもつ貼り付け突帶が一条のみ回る。(42)は頸部に沈線文を回らす壺である。(43・44・46・47)は平底の底部である。いずれの土器も弥生時代前期のものと判断される。

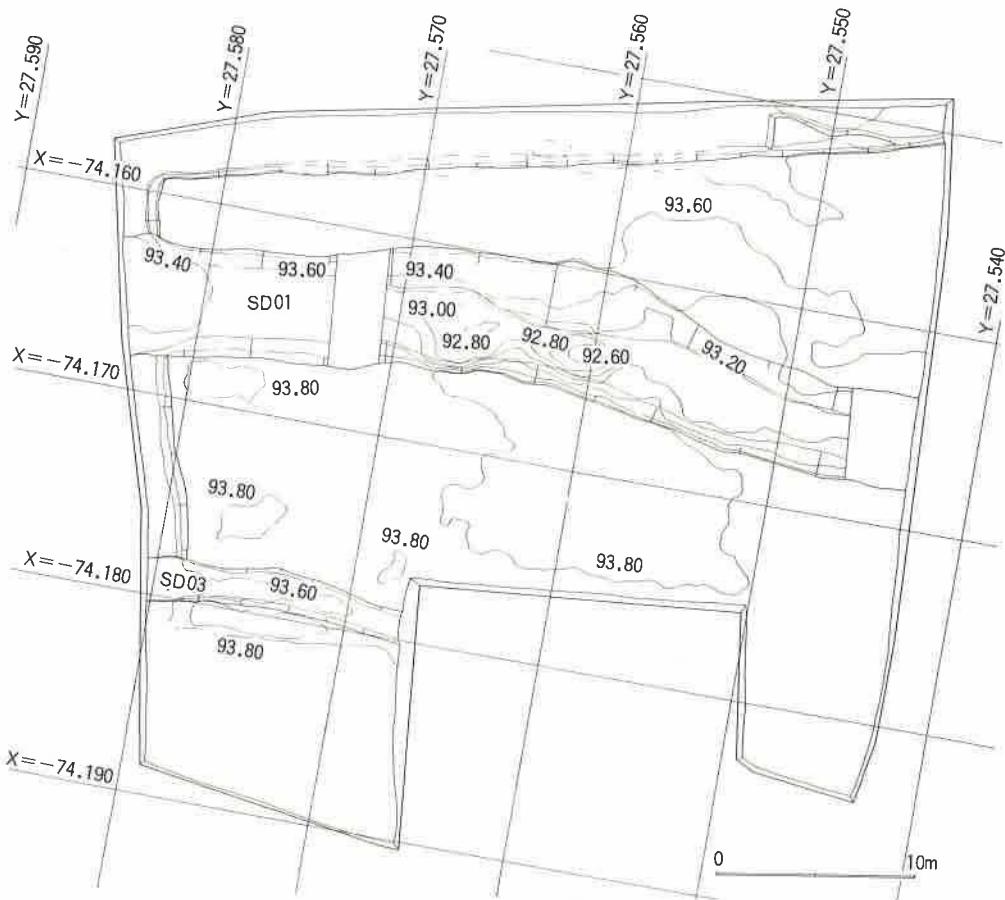
第2の群に属するものは、出土遺物のみであり、別項で説明を加える。



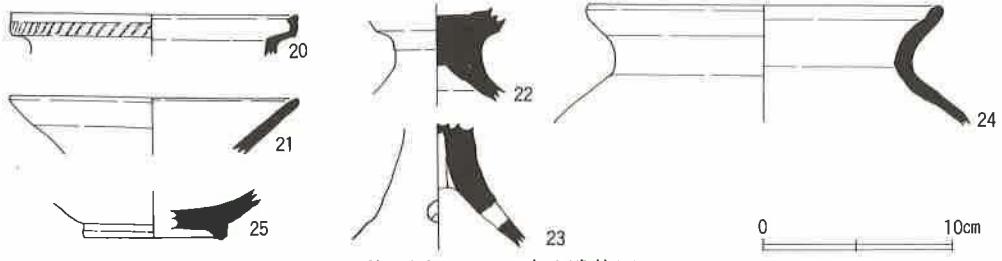
第7図 SD01出土遺物(1)

第5トレンチの調査において最もはじめに確認されたSD01が、第3の群に属する。第8図に示した地形図は、第5トレンチにおけるSD01の規模を示したもので、これによると現存する第5トレンチの遺構面が周囲より一段高い地形を構成し、その中央部に一条の溝SD01が掘り込まれたことが理解されよう。溝は緩やかなV字形を呈しており、基底部は部分的に深い箇所を築く。

遺構の内部には暗灰褐色の粘質土をはじめ若干量の遺物を包含する堆積土が含まれる。第7図に示した土器は、SD01の埋土から出土した土師器の甕である。口径16.4cm・器高



第8図 第5トレンチ地形図



第9図 SD01出土遺物(2)

27.4cmを測り、短く外反する口縁部と幾分縦長の体部から構成される。頸部のナデ調整を境にして体部外面にはハケが施され、内面に輪積の粘土紐単位を残す。

また第9図に表した(20~24)の土器もSD01からの出土遺物である。先の(19)の土師器の甕は完形品であってたが、ここに掲載した土器はいずれも細片による出土遺物である。遺物は弥生式土器・須恵器・山茶碗から構成される。

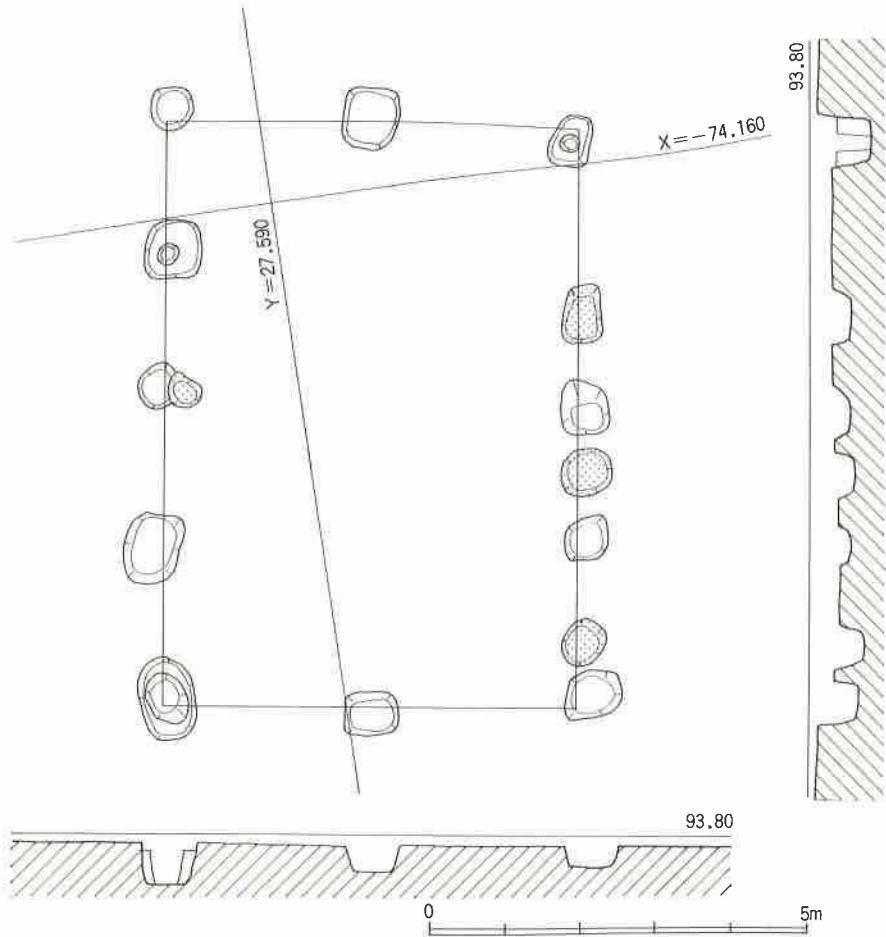
(20)は弥生式土器の甕の口縁部である。口径15.0cmを測り、受口状口縁をもつ。屈曲しながら外方にのびる頸部は、屈折して上方にまっすぐ伸びる口縁部に続く。約12mmの幅をもつ口縁部外面は、上半にナデ調整が残り幾分くぼんだ感を与えるが、下半には本来の器壁上から刺突列点文が回る。口縁部の上端は、やや張りのある面を持ち、内面寄りに幾分肥厚する。弥生時代中期後半に発達する近江の甕であるが、口縁部の上方への伸びが縮小しており、後期のものと判断される。

(21・22・23)は弥生式土器の高杯である。(21)は口径15.2cmを測り、斜め方向にまっすぐ伸びた口縁部を持つ。口縁部外面の上方にナデ調整が認められる。畿内の高杯に比べ、口縁部の立ち上がりがきつく、近江湖北地域の特徴的な土器である。(22)は器壁の厚い小形の高杯脚柱部である。杯部から口縁部へのつながりが脚部にちかく、きつい稜線を残しているのが特徴。(23)は中空の高杯脚部である。極端に器壁を薄めながら脚端部にのびる。四方向に円形の透しを穿っている。以上の遺物は、第2群のものに相当する。

(24)は須恵器の甕である。口径18.2cmを測り、中形のタイプを呈する。頸部から口縁部へのつながりは、下半が外方に屈曲し、上半が内方に屈曲する。口縁部上端は丸く終えられる。体部外面には叩き等の手法が残されていない。

(25)は灰釉陶器(山茶碗)の底部である。SD01の最西端・最上層で出土した。

第7図と第9図に示したこれらの出土遺物の年代観では、弥生時代後期から平安時代後期に至る時期が明らかにされ、SD01の埋設時を知る有力な手がかりとなろう。遺構が埋設された年代については、続いて説明を加える大形の掘立柱建物群築造以前と考えられ、開削された年代はこれに先行する。遺物の上では、弥生時代から古墳時代に至るもののが該当し、ここでは第3群の遺構として理解できる。



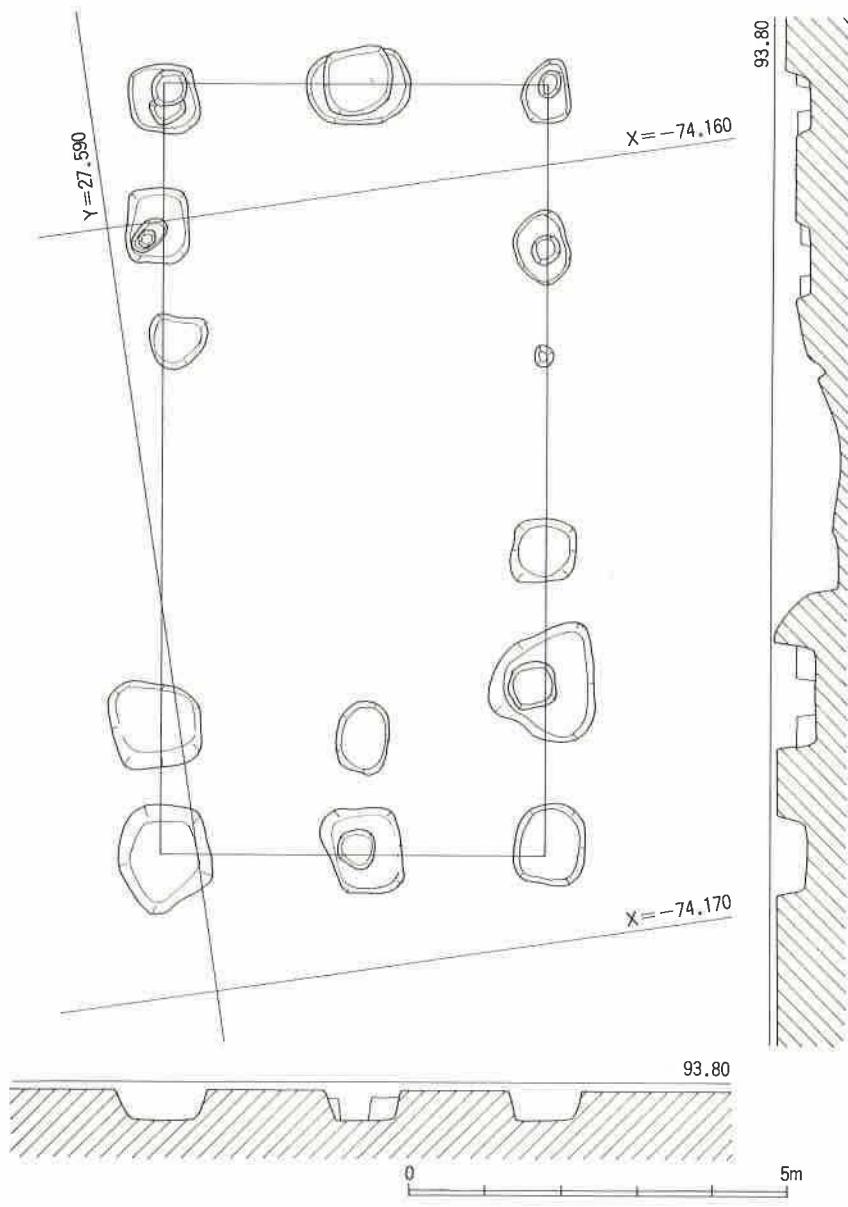
第10図 S B 01遺構平面図

S B 01

検出した建物群の中で北西に位置する。梁行2間(5m50cm)・桁行4間(7m70cm)を測り、南北棟建物を構成する。柱穴掘り方は方形プランを呈し、一辺55cm~110cm規模を測る。掘り方内部には直径30cm前後の円形の柱穴が残されており、遺構面から柱穴基底部までの深さは最大55cmを測る。柱穴間の芯心は、梁行が275cm・桁行が192cm前後を測る。

柱穴の掘り方には新旧二時期のものがあり、ここに示したものは古い建物遺構の柱筋であり、隅の掘り方を一段と深く構築する他、遺存状態の良いことが理解できる。一方の新しい建物遺構については、後世の削平等により遺存状態が悪く、全体規模を明らかにすることはできない。

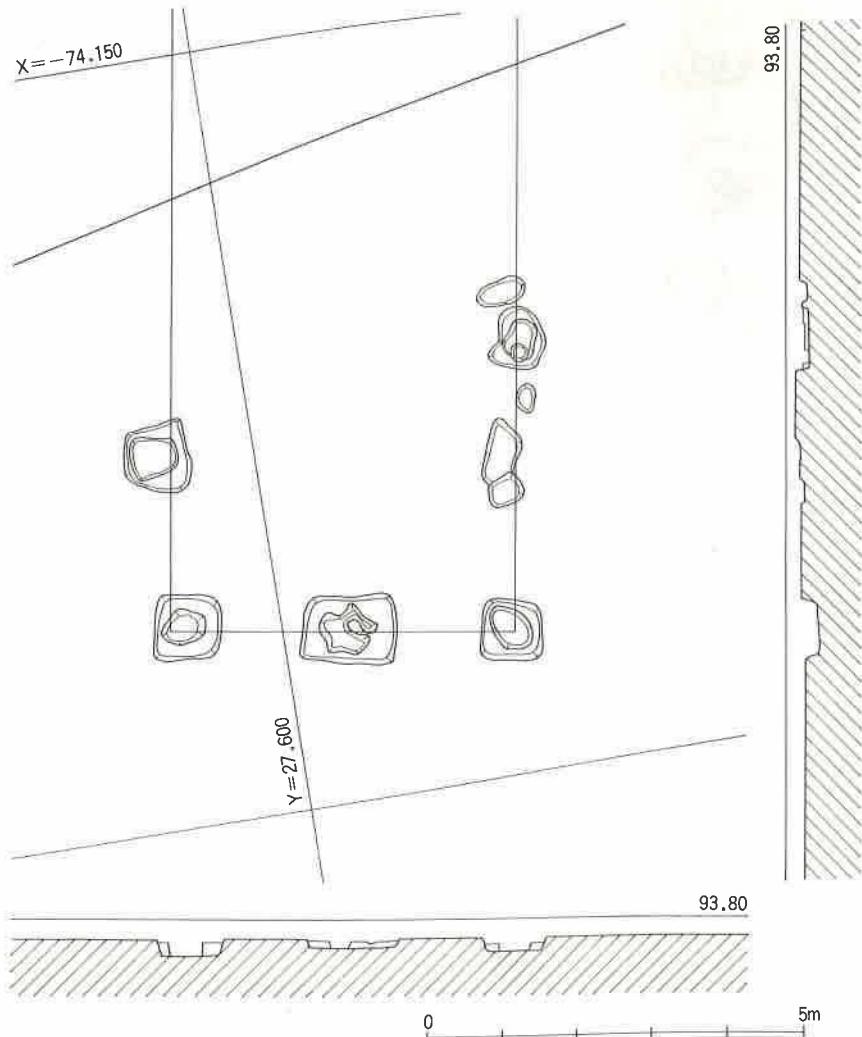
S B 01・S B 02・S B 06の3棟の東西に並ぶ南北棟の建物遺構は、梁行南面の柱列延長軸線を共通させており、S B 01の南面梁行柱列を東方に延長すると、S B 02とS B 06の南面梁行柱列に合致し、3棟の建物配置に統一感が認められる。



第11図 S B 02遺構平面図

S B 02

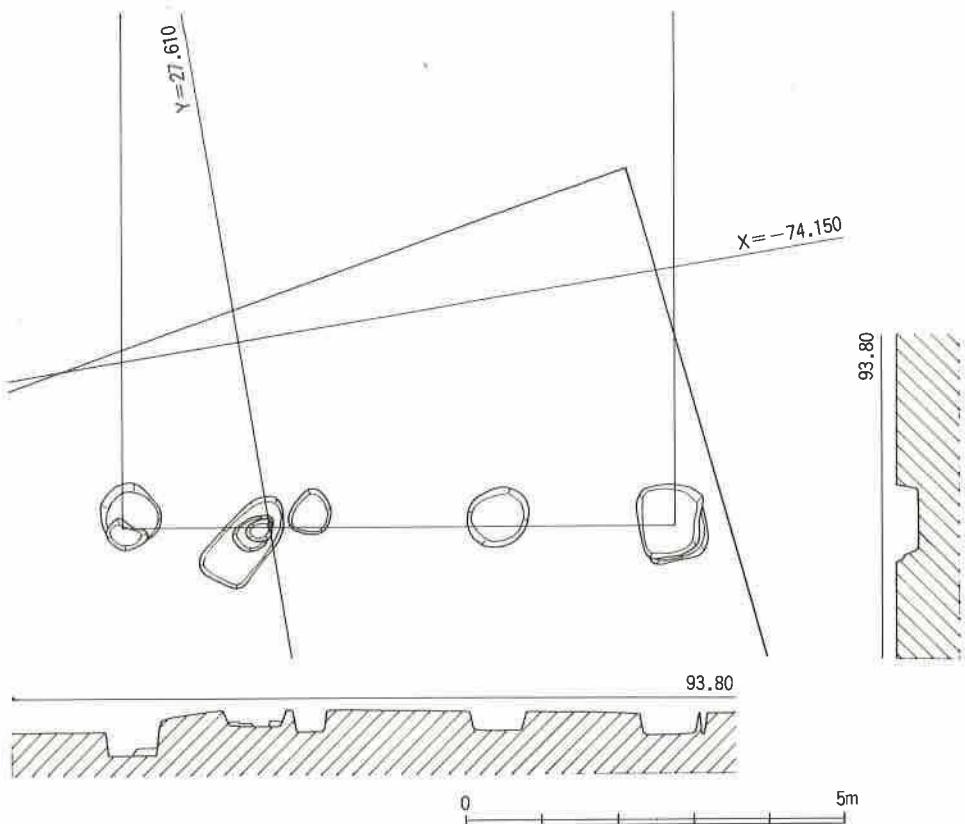
検出した建物群の中でS B 01の東隣に位置する。梁行2間(5m10cm)・桁行5間(10m10cm)を測り、南北棟建物を構成する。柱穴掘り方は方形プランを呈し、一辺60cm~150cm規模を測る。掘り方内部には直径30cm前後の円形の柱穴が残されており、遺構面から柱穴基底部までの深さは最大55cmを測る。柱穴間の芯心は、梁行265cm・桁行が220cm・140cm・290cm・140cm・220cmを測る。S B 02はS B 01より桁行が一間分長く、中央部の柱間が最も長い。また東側桁行柱列で北端から二番目の柱穴には、柱が遺存していた。



第12図 S B 03遺構平面図

S B 03

検出した建物群の中で中央北端に位置し、S B 02の北東に隣接する。建物北部は後世の削平を受けており、全体規模は不明であるが、梁行2間（4m60cm）以上・桁行2間（3m90cm）以上を測り、南北棟建物を構成すると推測される。柱穴掘り方は方形プランを呈し、一辺50cm～120cm規模を測る。掘り方内部には直径50cm前後の円形の柱穴痕が残されており、遺構面から柱穴基底部までの深さは最大25cmを測り、極めて浅いのが特徴である。これは後世の削平行為の激しさを物語る。柱穴間の芯心は、梁行が115cm・桁行が195cm前後を測る。S B 03の南側梁行柱列を延長すると、S B 05の南側桁行に合致する。



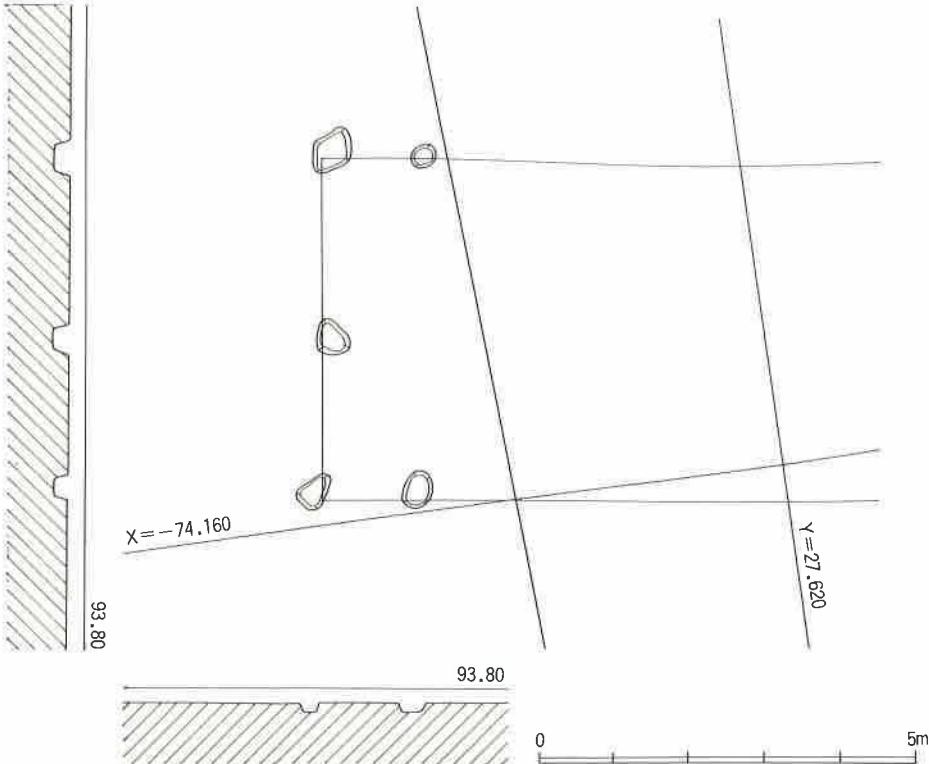
第13図 S B 04遺構平面図

S B 04

検出した建物群の中で最も北西に位置する。桁行3間（7m30cm）を測るが、梁行間数は不明である。遺構面が後世の削平を受けて大きく変貌しており、遺構の北側の拡がりが全く不明である。遺構は東西棟建物を構成するものと推測され、周辺の建物群とともに所謂コの字形配列を示す。柱穴掘り方は方形プランを呈し、一辺55cm～110cm規模を測る。掘り方内部には直径30cm前後の円形の柱穴が残されており、遺構面から柱穴基底部までの深さは最大30cmを測る。柱穴間の芯心は、梁行が240cm・250cm・240cmを測る。

西側に隣接する南北棟建物S B 02・S B 03との間に広場状の空間をもつが、S B 04自身の遺構規模は大がかりなものでなく、3間規模の桁行を示すのみである。このためS B 04のさらに北側に大規模な東西棟建物の存在が予測される。

現況では、S B 04の北側の地形は一段低くなっているが、検出される黄褐色シルト層（遺構基盤層）の安定度や、同遺構の柱穴遺存状況から周辺の旧景が、S B 04の北側でさらによくなっていたことが容易に理解でき、最も地形の高まった位置に中心となった東西棟建物が存在したと考えられる。



第14図 S B 05遺構平面図

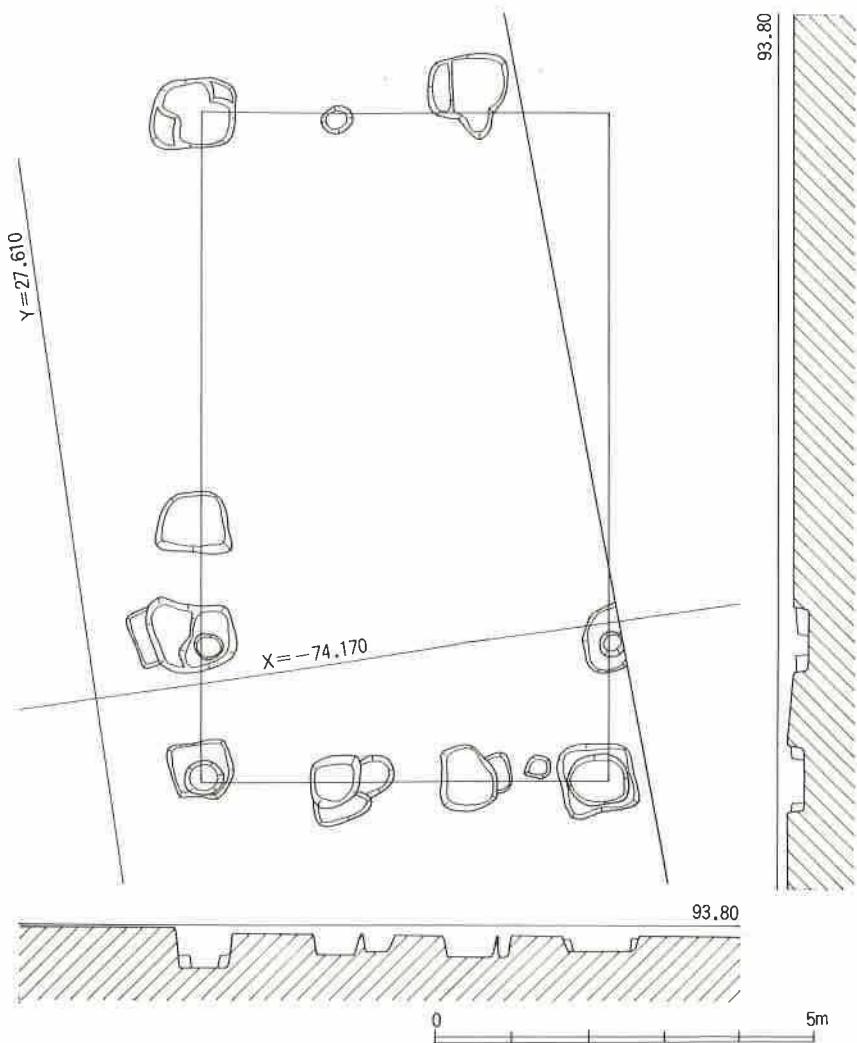
S B 05

検出した建物群の中で北東隅に位置する。梁行2間（4m50cm）桁行1間（1m30cm）以上を測り、南北棟建物を構成する。柱穴掘り方は方形プランを呈し、一辺30cm～50cm規模を測り、先の建物遺構に比べて幾分小振りの遺構を呈する。幾分掘り方内部では柱穴と掘り方を区分することができなかった。また遺構面から柱穴基底部までの深さは最大20cmを測る。柱穴間の芯心は、梁行が225cmを測るが、桁行については西端で130cmを測る他、全容は不明である。

S B 05は、S B 04の南東側に隣接する東西棟建物で、南側の桁行柱列の延長が、西側に隣接するS B 03の南側梁行柱列と合致する。このことから、この建物もまたS B 01・S B 02・S B 03と同じ設計プランのもとで構築されたことが理解できる。

S B 05の西側梁行柱列とS B 04の東側梁行柱列は同軸延長上には存在せず、約2mの距離を保つ。お互いの東西棟建物には南面あるいは北面の庇構造が無く、建物壁間のこの距離が、実質的な建物視覚距離にあたる。

またS B 04の遺構に比べて、柱穴構造が貧弱であり、建物間における北部重視のコ字形配列が示される。

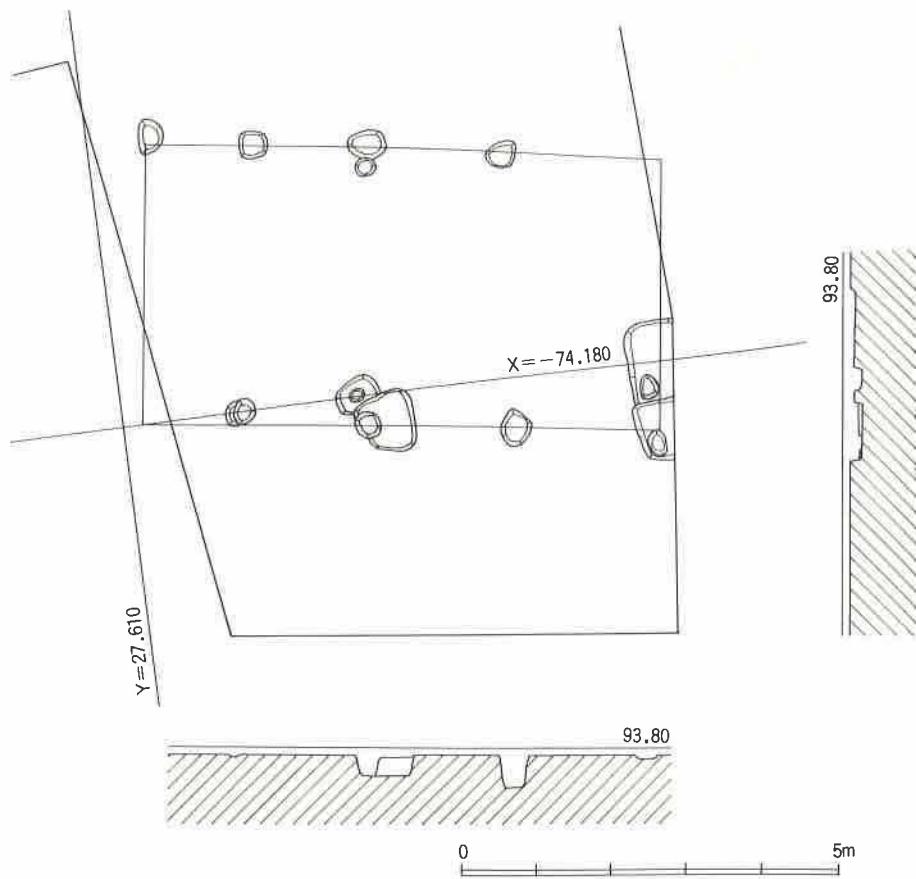


第15図 S B 06遺構平面図

S B 06

検出した建物群の中で西端中央に位置する。梁行3間（5m40cm）・桁行5間（8m80）を測り、南北棟建物を構成する。柱穴掘り方は方形プランを呈し、一辺65cm～100cm規模を測る。掘り方内部には直径30cm前後の円形の柱穴が残されており、遺構面から柱穴基底部までの深さは最大30cmを測る。柱穴間の芯心は、梁行が180cmを測り、桁行が160cm～170cmを測る。

遺構はS B 05の南側に隣接しており、南側梁行柱列の延長がS B 01・S B 02の南側梁行柱列に合致する。検出した遺構のうち北半部のものについては、S B 01調査時に欠損しており、溝の埋土と柱穴掘り方埋土の識別ができず、第15図に記したとおりの平面形が追及できたに過ぎない。

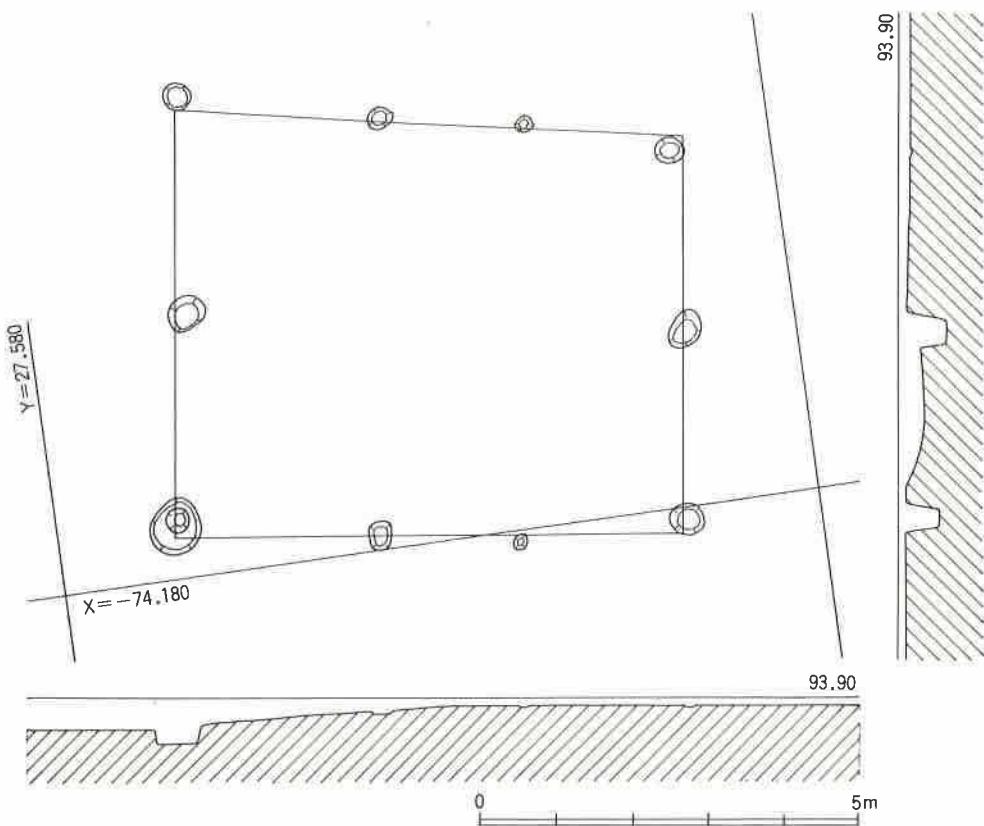


第16図 S B 07遺構平面図

S B 07

検出した建物群の中で南東隅に位置する。梁行2間（3m60cm）・桁行4間（6m80cm）を測り、南北棟建物を構成する。検出遺構の多くは後世の削平を受けており、柱穴の掘り方を遺存する箇所が大半である。このうち遺存する柱穴掘り方は方形プランを呈し、一辺30cm～75cm規模を測る。遺存する柱穴は直径30cm前後を測る円形の柱穴である。遺構面から柱穴基底部までの深さは最大30cmを測るが、大部分の柱穴は、削平により深い遺存状態を示している。柱穴間の芯心は、梁行が180cm・桁行が140cm前後を測る。

S B 07の建物構造は東西棟建物を構成するが、遺存する柱穴からS B 04より貧弱な構築が推測される。



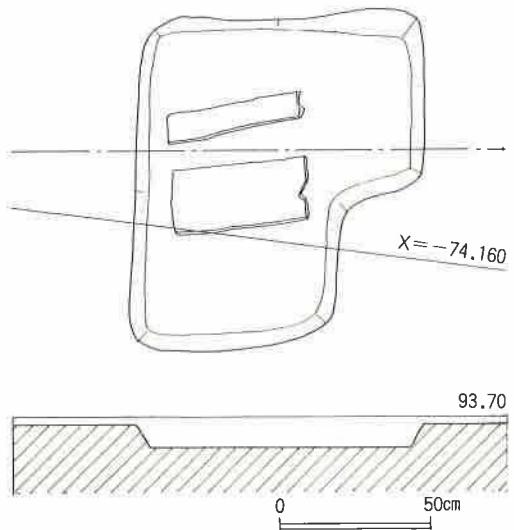
第17図 SB 08遺構平面図

S B 08

検出した建物群の中で南端中央に位置する。梁行 2 間（5 m20cm）・桁行 3 間（6 m60cm）を測り、東西棟建物を構成する。柱穴掘り方は不正形プランを呈し、掘り方と柱穴を区分しないものも認められる。遺存する柱穴掘り方は、一辺50cm前後の規模を測る。柱穴は直径30cm前後のものが主流で、遺構面から柱穴基底部までの深さは最大25cmを測る。柱穴間の芯心は、梁行が260cm～280cm・桁行が190cm・200cm・270cmを測る。

S B 09

検出した建物群の中で調査区の南西に位置する。梁行 3 間（4 m20cm）を測るが、桁行は不明である。遺構は東西棟建物を構成すると推測されるが、詳細は不明である。柱穴と掘り方の区分は不明瞭であるが、区分された南西隅の柱穴掘り方一辺80cm規模を測る。掘り方内部には直径30cm前後の円形の柱穴が残されており、遺構面から柱穴基底部までの深さは最大15cmを測る。



第18図 SK01遺構図

続いて第5群に属する遺構としては、掘立柱建物と土壙・井戸等がある。このうち土壙にはSK01とSK02があり、いずれも調査地区の中で北東部に位置する。

SK01は逆L字形を呈する遺構で、南北1m 5cm・東西95cmの最大規模を測る。遺構の深さは約15cmを測り、基底部は水平な状態をなす。遺構の内部には暗茶褐色の粘質土が堆積しており、その上部に木製品の板材が含まれていた。

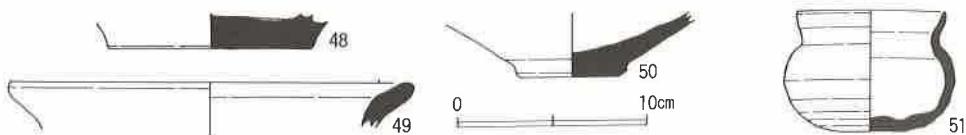
また堆積土中には2点の弥生式土器と土師器の皿が含まれていた。弥生式土器には、甕の底部(48)と口縁部(49)があり、SX01

からの出土遺物に傾向を近似させているが、同時に出土した土師器の小皿の存在から、この遺構の構成年代が、弥生時代であるとは判定し難い。

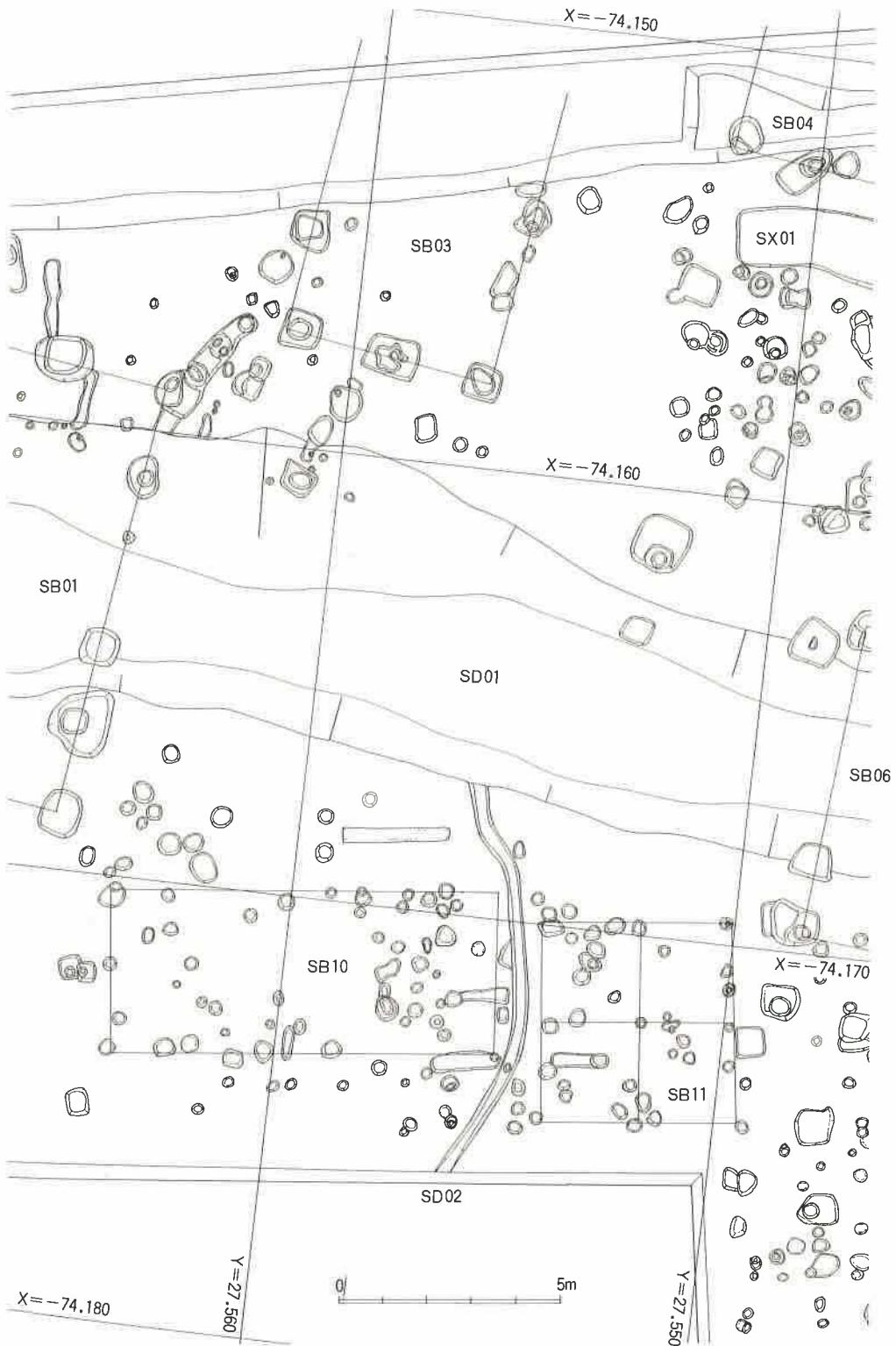
またSK01の北側にはSK02が存在し、直径約50cmを測る円形の土壙から土師器の小皿(77・78・83)が出土している。これら2基の土壙の出土土師器は類似する。

調査区の南端近くで検出した井戸SE01は、円形プランを呈しており、直径約1m・深さ約1mを測る。遺構は素掘りの井戸で、内部の埋土からは灰釉陶器(山茶碗)の鉢(115・116)が出土した。

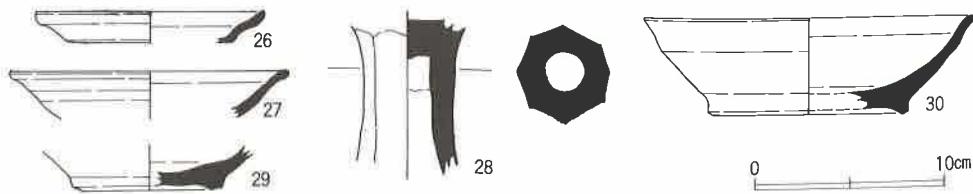
これらの土壙や井戸と共に存すると考えられる遺構が、2棟の掘立柱建物(SB10とSB11)である。これらの遺物遺構は、第2群の遺物遺構よりも後出したもので、その主軸方位が調査地の西側に拡がる条里景観と合致する。SB11は梁行2間(3m60cm)・桁行5間(8m60cm)を測る東西棟建物である。SB10の南東隅の柱穴からは、灰釉陶器の椀(60)が出土している。またSB10の東側に隣接するSB11は、梁行2間(4m40cm)・桁行2間(4m50cm)の総柱建物である。両遺構の間には、区画溝SD02が存在し、その内部からは、土師器の皿(26)・高杯(28)と山茶碗の椀(29・30)が出土している。(26)



第19図 第5トレンチ出土遺物(1)



第20図 SB10・SB11遺構平面図



第21図 SD 02出土遺物

は一段ナデ調整により窪んだ状況を呈する。(28)は8面取の高杯脚部である。下半の欠損状況から器高の復元は不可能である。(29・30)は山茶碗の椀である。これらの出土遺物の年代観は、隣接する掘立柱建物S B01とS B11の構築年代を知る貴重な資料と考えられ、平安時代の後期には、第3群の遺構が西方の条里景観に規制されながら構築されていたものと推測される。

また、調査区の南西部には、東西方向に伸びる溝SD 03の存在が知られる。この遺構は、幅2m前後・深さ25mを測り、その遺構埋土中からは、土師器の皿(31・32)と台付皿(33)、須恵器の甕(34)が出土した。

土師器の皿(31・32)は口径8.4cmないし9.8cmを測り、一段ナデ調整が認められる。また(33)は皿部を欠損した台付皿の脚部であり、脚台高3.4cm・底部9.6cmを測る。(34)は須恵器の甕で、口縁部の上端が外部に肥厚し、体部外面の肩口にカキメが施される。

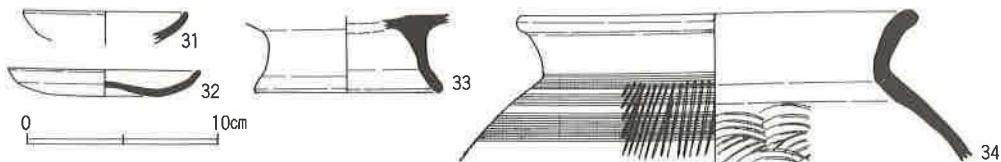
SD 03はS B08より後出した遺構であり、溝の堆積土を完掘した状態で、柱穴の存在が確認された。

以上が第5トレンチで検出した遺構の概要である。はじめに述べたとおり同遺構は、5群のものに区分される。

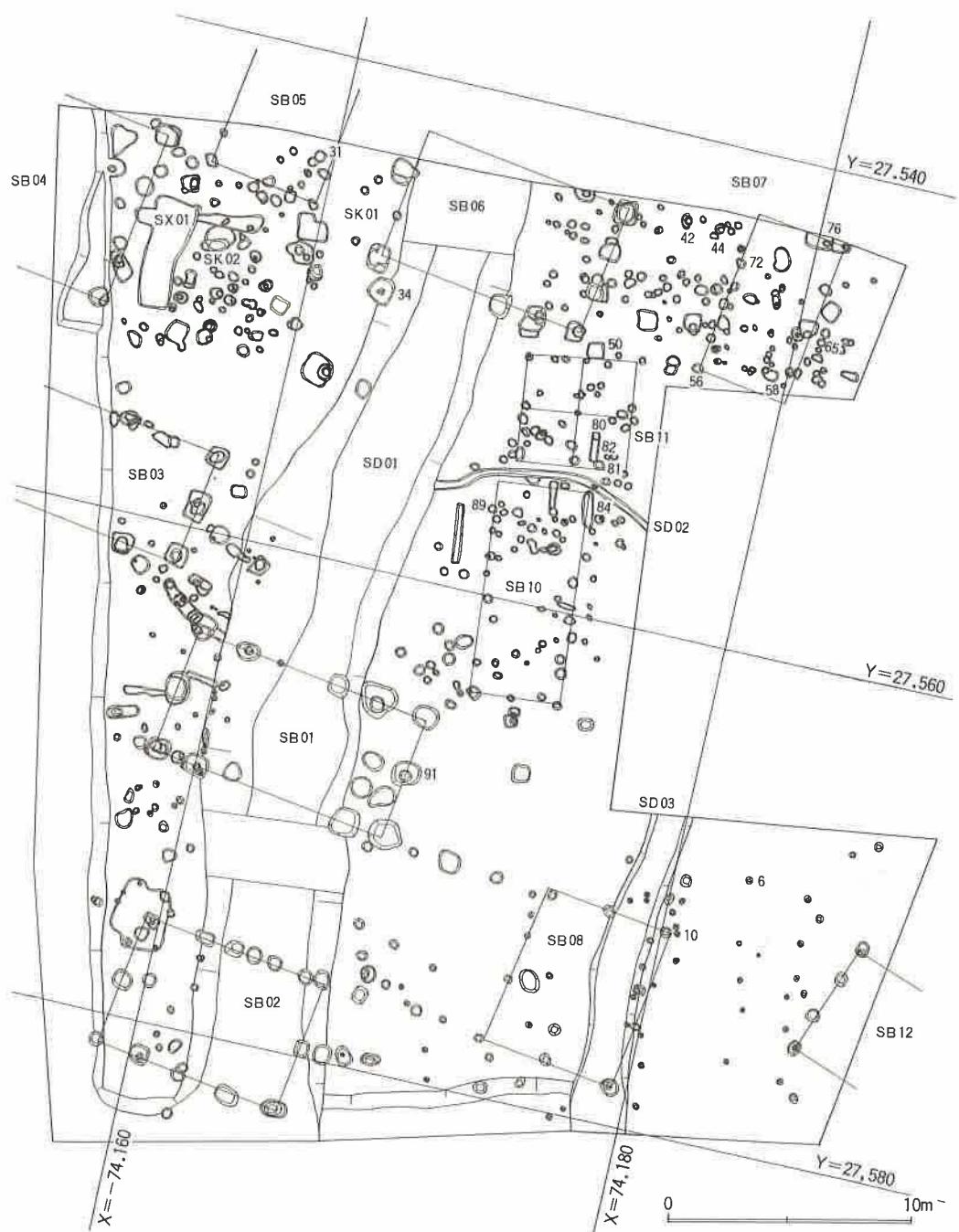
第1群とされたSX 01は、第5トレンチの中で初見する弥生時代前期の遺構を解釈される。本来、この時期に該当する遺構が周辺に分布していたものと考えられるが、後世の削平行行為によって、消失したことが推測される。

第2群の資料については、出土遺物の中にのみ認められ、第5トレンチ以外の箇所で遺構が検出していることから、ここでは弥生時代後期の年代のみ紹介するに留まる。

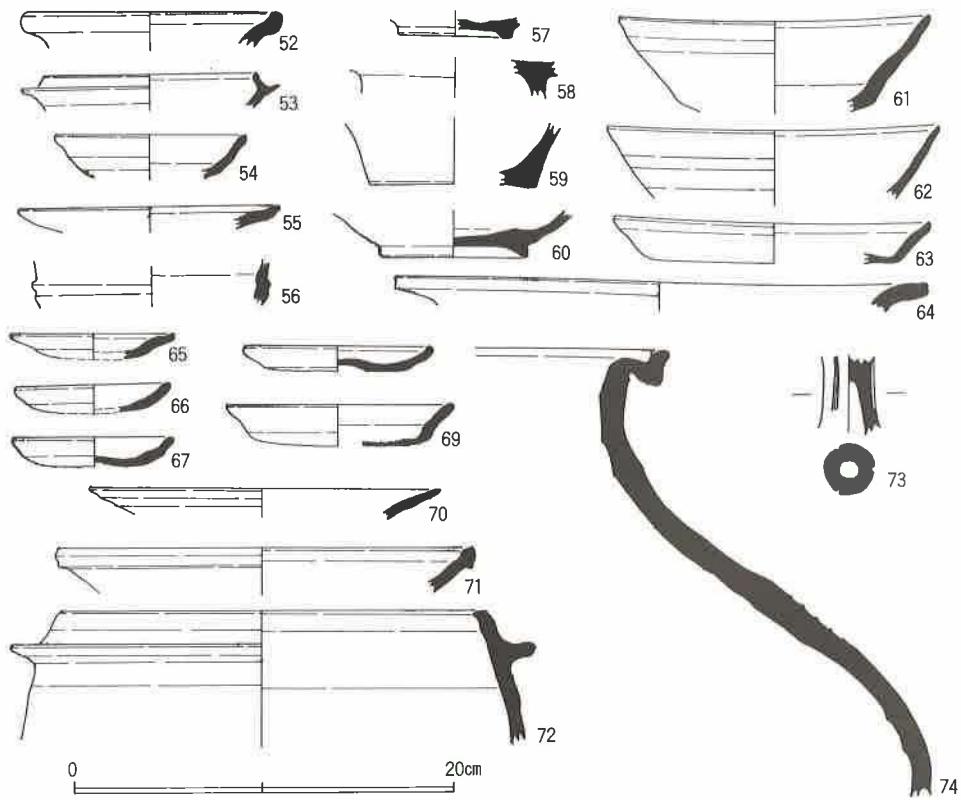
第3群の遺構は、調査区の中央を東西方向に伸びるSD 01によって紹介される。この



第22図 SD 03出土遺物



第23図 第5トレンチ平面図

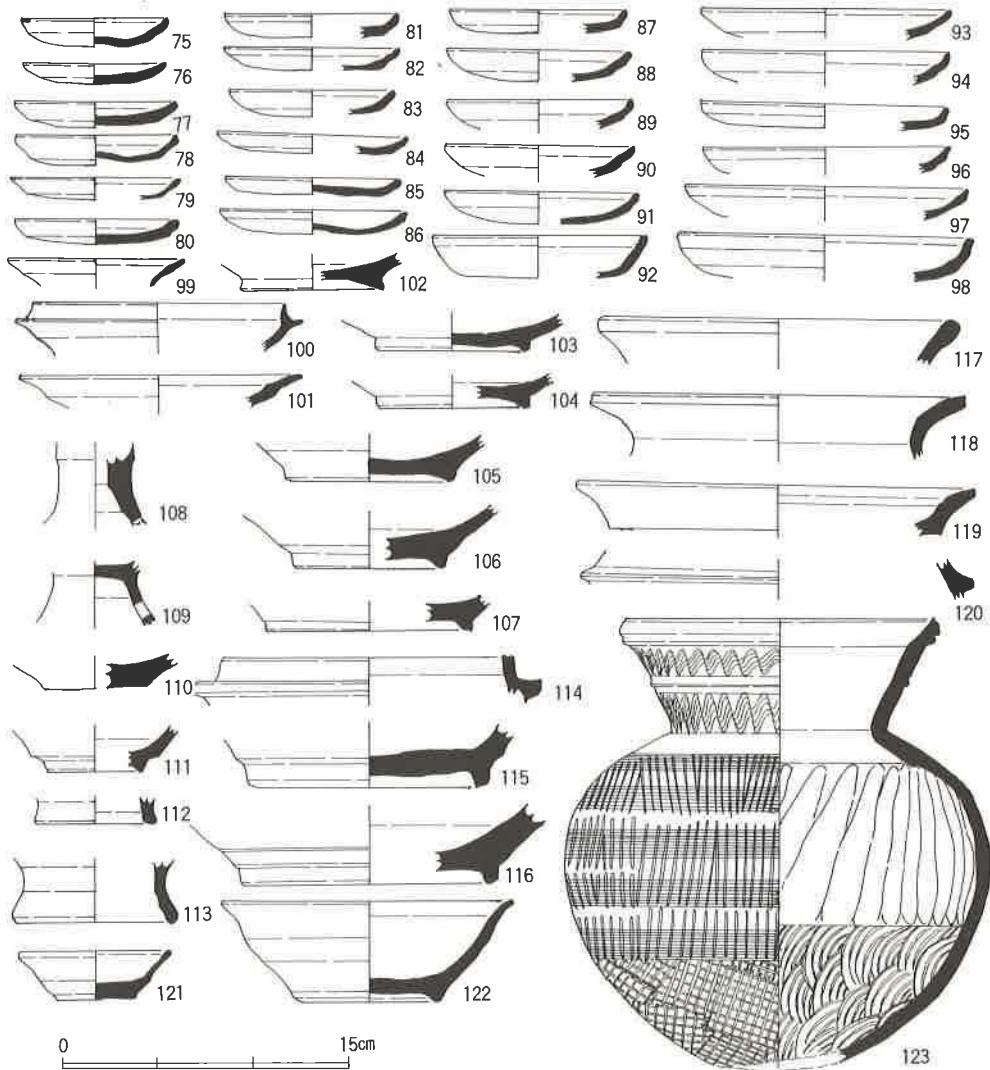


第24図 第5トレンチ出土遺物(2)

遺構は第4群の遺構が構築される以前に埋設されているが、その開削年代としては出土した土師器甕から、5世紀末葉の古墳時代中期の年代を一応の目安としたい。

第4群の遺構は、主軸を約10度東傾させた掘立柱建物群で、所謂コの字形配列を構成する。遺構群の中心部は、調査トレンチの北東隅よりもさらに北外方に存在したと考えられ、この位置の東西棟建物を中心として、その全面に東西棟建物（S B04）が並列し、他の建物によってコの字形の配列が構成される。建物プランの共通基軸線が各所で確認されているため、規格的建物群であることは安易に理解できるが、この建物群の特徴を別に挙げると、柱穴掘り方規模が大きく、南北棟建物が多く、東西棟建物が庇を持たず、総柱建物が含まれないことになる。このうち庇を持つ建物と総柱建物の存在は、調査範囲の限定によることも関係しており、今後の周辺調査の問題となろう。周辺の遺構から出土した須恵器の杯や、土師器の高杯から平安時代前期の時期を一応の目安としている。

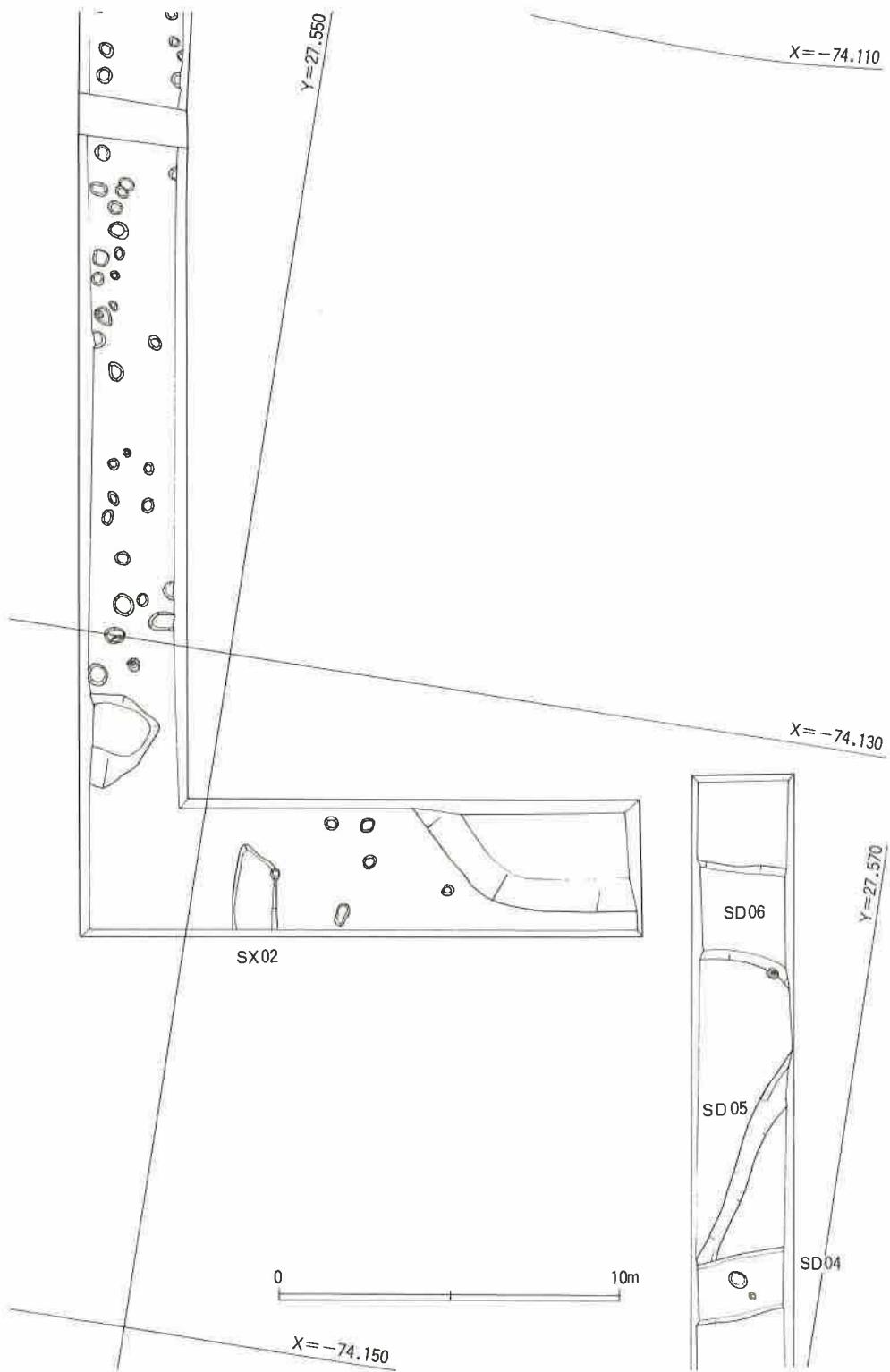
第5群の建物は、第4群の建物より後出しており、コの字形配列の建物群が廃絶した後に出現する。この時点では、調査地の西方には統一条里が普及しており、ここに出現する建物群に景観条里からの規制が認められる。この普及時期を出土遺物の年代観から平安時



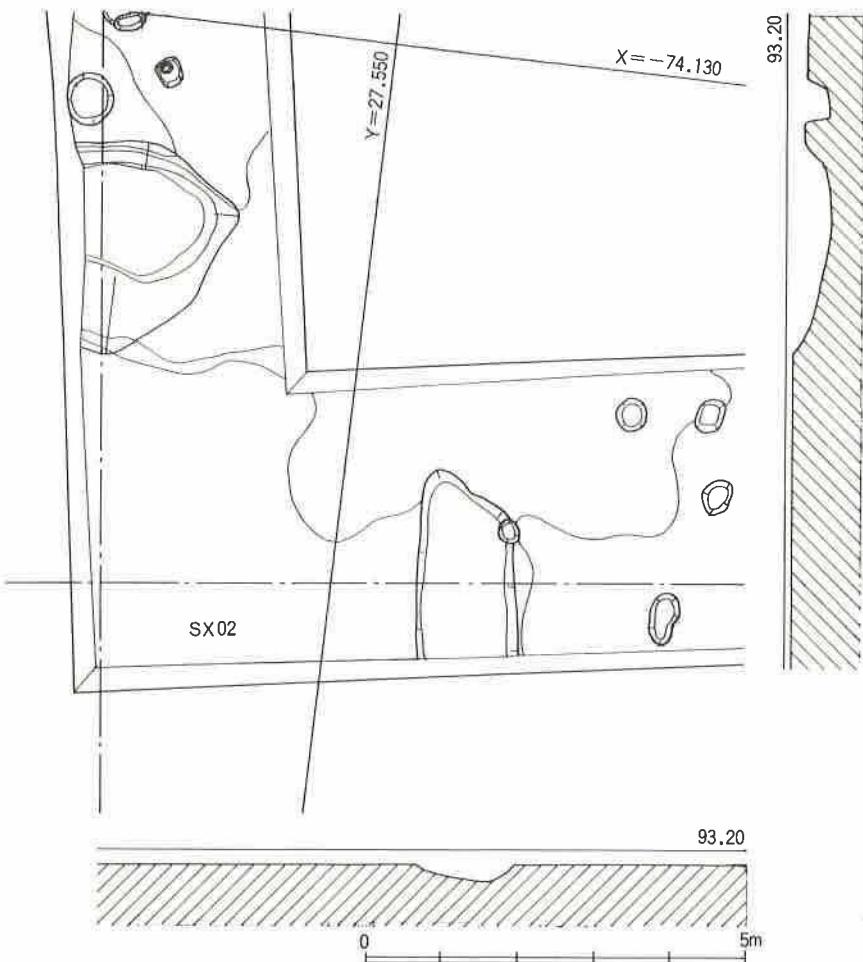
第25図 第5トレンチ・第8トレンチ出土遺物

代後期までとした。

この他に第5トレンチの各遺構から出土した遺物について、簡単に説明を加える。柱穴6からは須恵器の壺(52)と土師器の台付さら(59)、柱穴10からは須恵器の杯身(53)、柱穴31からは土師器の椀(54)と高杯(61)、柱穴42からは須恵器の高台部(57)、柱穴44からは瓦質土器の羽釜(72)、柱穴50からは土師器の皿(55・65)、柱穴56からは弥生式土器の底部(59)・須恵器の高杯(73)・土師器の皿(63)、柱穴58からは須恵器の高杯(56)、柱穴65からは土師器の高杯(62)、柱穴72からは弥生式土器の壺(64)、柱穴76からは須恵器の皿(70)、柱穴80からは土師器の小皿(68)、柱穴81からは陶器の甕(74)、柱穴82からは土師器の皿(69)、柱穴84からは灰釉陶器の椀(60)、柱穴89からは土師器の小皿



第26図 第6トレンチ・第7トレンチ平面図



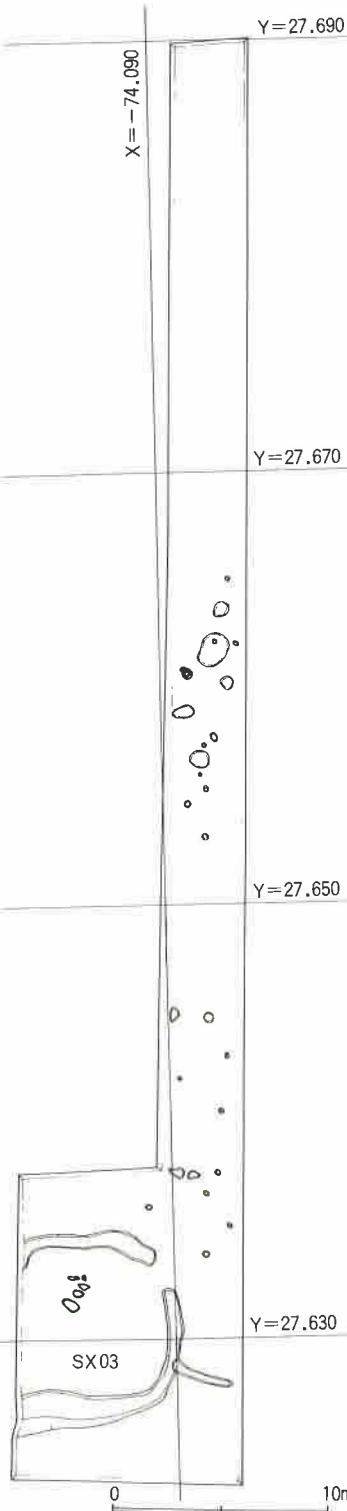
第27図 SX 02遺構平面図

(66・67)、柱穴91からは須恵器の鉢（71）などが出土した。

第6トレンチ・第7トレンチの調査

第5トレンチの西隣から北西方向にかけて第6トレンチと第7トレンチを設定し、発掘調査した。これらの調査区では、耕作土直下から遺構が検出し、3条の溝（SD04・SD05・SD06）と1基の方形周溝墓（SX02）が確認された。このうちSD06からは須恵器（124）が出土し、SX02からは弥生式土器が出土した。いずれも調査範囲の制限から詳細な内容は不明である。

第7トレンチの北側では、本件の発掘調査に先行して灌漑排水整備に関連した埋塚遺跡の第1次調査が実施されている。この調査で遺跡の北端にあたる地形上の大規模な落ちこみが検出されており、河川の氾濫による層位の逆転現象が認められ、堆積土の上層から弥



第28図 第8トレンチ 遺構平面図 10m (126・127・128・129)、外反する口縁の甕 (130・131)、突帯を巡らせる壺 (132)、底部 (133・134)、高杯 (135・136・137・138・139)、丸底の壺 (140)などがある。このうち (126~129) の受口状

生式土器が確認され、下層から平安時代の須恵器が出土するといった現象が認められている。このことについては、既に「近江町文化財調査報告書第8集 埋塚遺跡」の中で取り扱っているが、これによって第7トレンチで検出された方形周溝墓が、遺跡の末端部で水際に立地することが証明できる。

第8トレンチの調査

第5トレンチの北東方向で、排水路工事に伴う調査区を設定した。

先に述べたとおり、第1次調査で検出できた地形上の落ちこみは、現存する地形にも段差を残しており、第8トレンチの設定箇所は、遺跡北端部で段差の高い側にあたる。

また試掘調査第28トレンチが隣接しており、今回の発掘調査トレンチを拡張し、試掘時に検出した遺構の再追跡を実施した。

第28図に記した調査区が、第8トレンチの検出遺構である。同図の左側が北方あたり、調査区の西端で弥生時代後期の方形周溝墓(SX03)を検出した。

このSX03こそが試掘第28トレンチで検出した溝状遺構であり、西側の周溝を掘削し、第3図に紹介した須恵器が出土したことになる。第28図で見るとSX03の西側周溝が、試掘時の掘削によって拡がっていることが明白である。

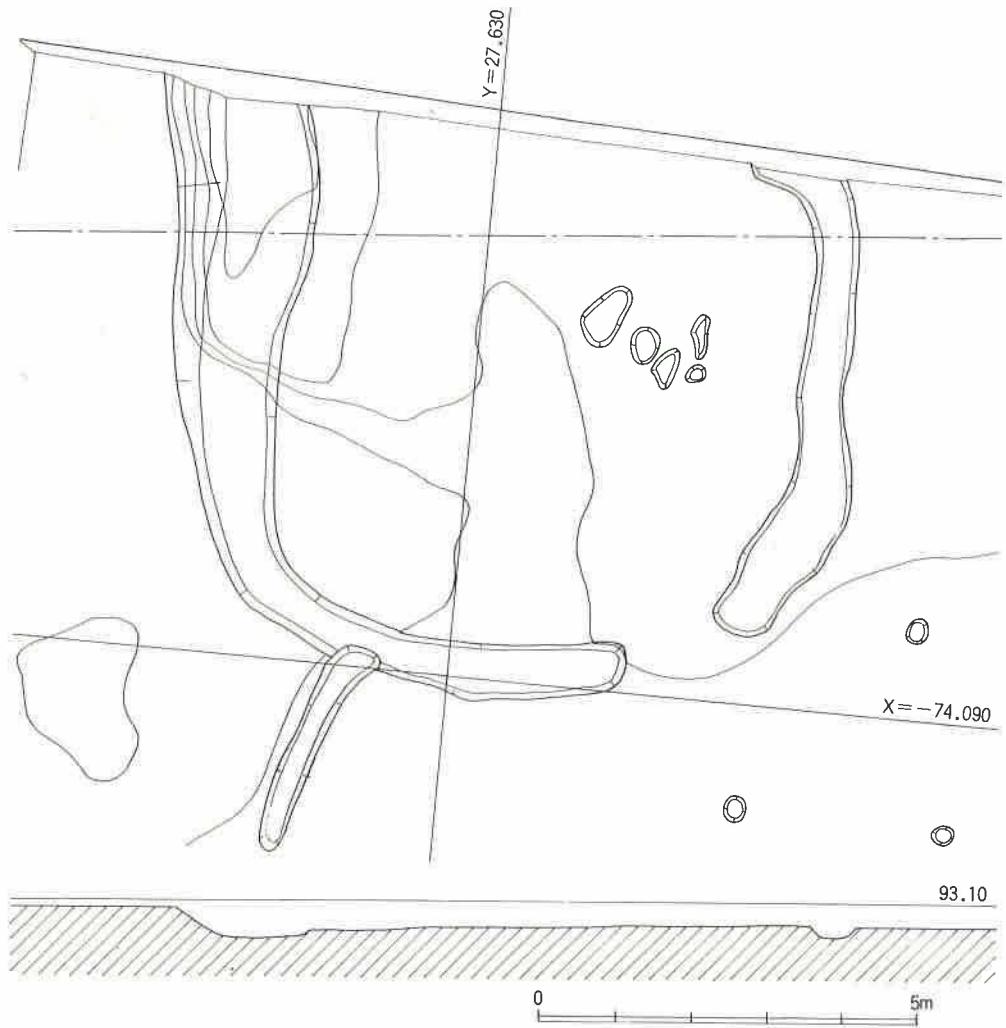
SX01は南北6m70cm以上・東西6m90cmを測り、幅70cm~100cm・深さ20cm規模の周溝が回る。また、周溝の南東隅部には陸橋部を伴う。

SX01以東で検出された遺構は、柱穴と土壙等であるが、性格や年代の明らかなものは無い。

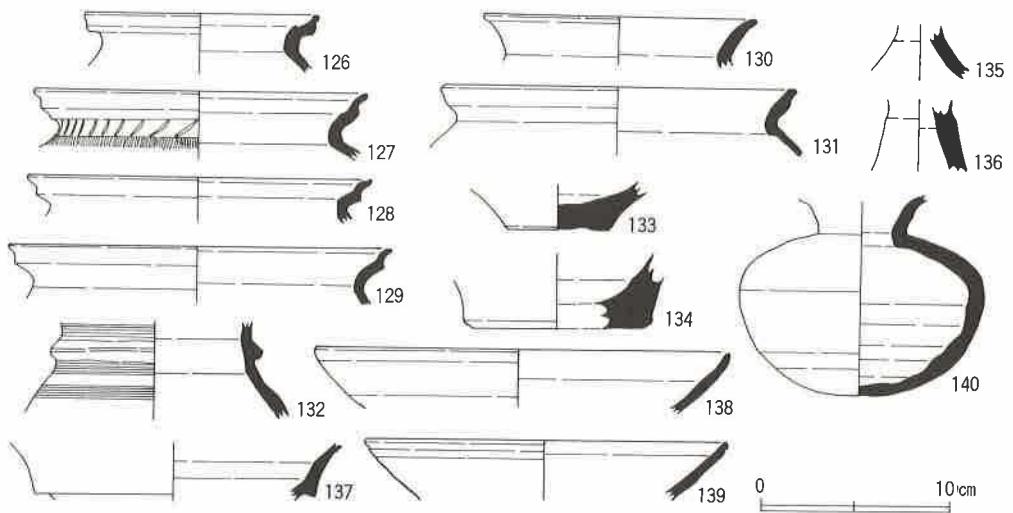
次にSX01から出土した遺物について説明を加えたい。試掘調査では遺構埋土の最上層から、須恵器が一括出土したが、発掘調査では遺構の基底部を精査しており、第30図に記した遺物を出土した。

出土した遺物はいずれも弥生時代後期の土器で、受口状口縁の甕

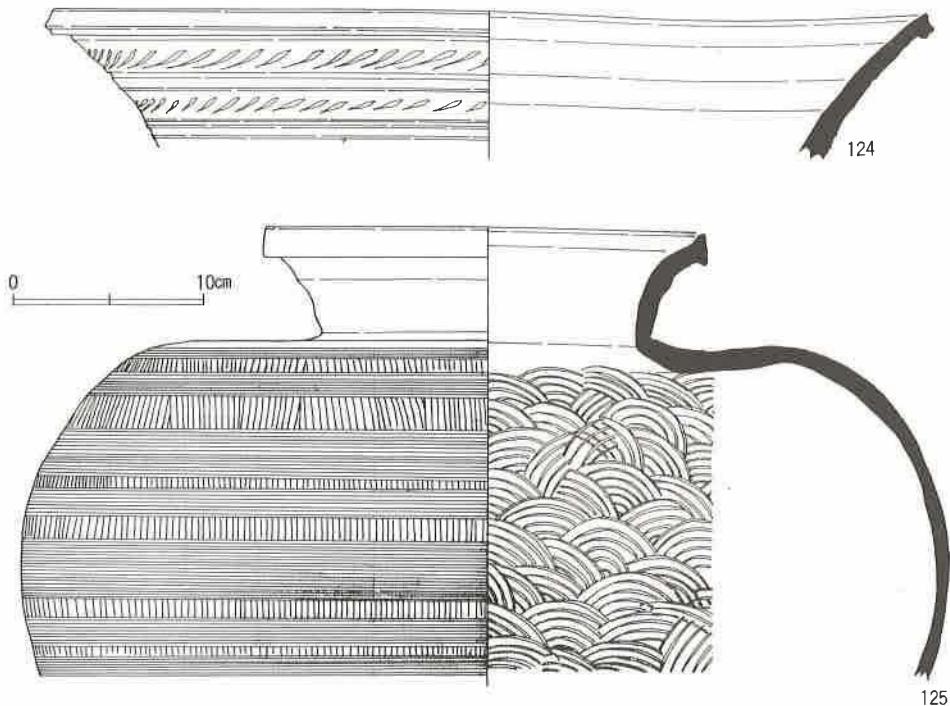
(126・127・128・129)、外反する口縁の甕 (130・131)、突帯を巡ら



第29図 S X 03遺構平面図



第30図 S X 03出土遺物



第31図 第6トレンチ・第8トレンチ出土遺物

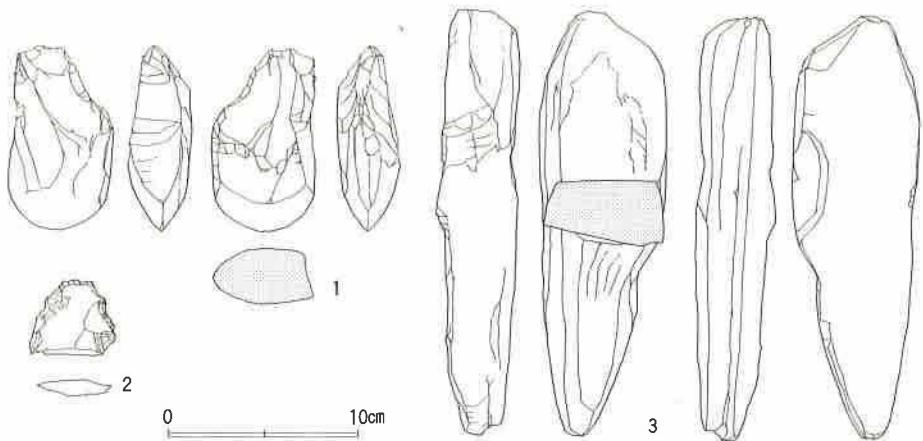
口縁甕は、第5トレンチ出土の甕（20）と比較して口縁部の退化が進んでおり、弥生時代後期の中で幾分形式の下がるものと思われる。

第8トレンチで確認されたSX03は、第7トレンチのSX02と同様に水際に位置する弥生時代後期の方形周溝墓群の存在が当地に推測されるに至った。

では、試掘第28トレンチの調査時に出土した須恵器は、いかなる状態で弥生時代の遺構中に混在したのであろうか。この問題を解く一つの手がかりとして第8トレンチ遺構面出土遺物（123・125）の存在がある。この2点の遺物は須恵器の壺（123）と俵形壺（125）で、遺構面の直上から出土した。これらの土器は、先の試掘第28トレンチ出土須恵器と近似した年代観をもつものであり、かつ完形品に近い状況もまた類似する。すなわち、これらの遺物は本来納められた位置から出土したのではなく、河川の氾濫等によって隣接地に二次堆積したものと考えられる。

この二次堆積の現状は、第1次調査の成果とも合致する内容であり、第5トレンチ第3群土器の存在や、第6トレンチSD06出土須恵器（124）の出土状況を理解するうえで、重要である。

最後に、今回の発掘調査で出土した石器を紹介したい。第32図に記したものが今回の発掘調査で出土した。（1）は第5トレンチのSD01から出土した磨製石斧、（2）は第5ト



第32図 石器実測図

レンチの柱穴34から出土したサヌカイトの剥片。(3)は第8トレンチ遺構面から出土した面取された石器である。調査地周辺には弥生時代のみならず縄文時代の遺跡も所在しており、今後の慎重な評価を持ちたい。

第5章 まとめ

今回実施した埋塚遺跡の第2次調査では、当初「古墳」が存在すると考えられていた箇所を対象として、その真偽を追及することができた。ほ場整備が実施される以前に小高い地形を成していた小字「埋塚」の地は、平安時代以降に大がかりな土地の削平行行為を受けており、古墳として実証される遺構は確認されなかった。

しかしながら、今回の調査では多時期におよぶ様々な遺構と遺物が確認された。これらの資料は、天の川右岸に位置する同遺跡の変遷を知る上で、最も貴重な資料となった。ここで明らかになった資料をもとに、埋塚遺跡の変遷について再度整理することでまとめとしたい。

近年の近江町の調査では、周辺の遺跡から縄文時代の遺構や遺物が発見され、広範囲にわたる縄文人の生活エリアが次第に明かにされるようになった。今回の調査においても用途の不明な石器が出土するなど、同時期に遺跡の存在した可能性も見え始めるようになった。しかしながら、今回の調査で明かにできる遺跡の初現は、弥生時代前期を待たなければならない。この時期を埋塚遺跡第Ⅰ期と仮定する。第Ⅰ期の遺構は、その大半が後世の削平を受けて消失しており、出土した遺物によって過去の存在が伝えられるに過ぎない。

調査地の北方約80mは、遺跡の北端にあたり、現地形から想像される以上の段差をもつて沼沢地に至る。この水際には弥生時代後期の方形周溝墓が構築され、第Ⅱ期の遺構群を構成する。弥生時代の墓域としては、当町内で4つの遺跡の存在が明らかとなった。これらの遺跡は、約1kmの間隔を保ちながら南北に連続しており、北から順に「法勝寺遺跡」・「長門寺遺跡」・「埋塚遺跡」・「西円寺遺跡」と呼ばれる。

今回の発掘調査では、古墳の存在を実証することはできなかったが、試掘第28トレンチ出土遺物等に明かな様に、旧来は調査地の周辺に存在したと考えられる。発掘調査で検出したSD01を周濠とみて、同溝状遺構の北側に方形の古墳を想定する向きもあるが、現時点では、第Ⅲ期の具体的な遺構を実証することはできない。

統いて、今回の発掘調査の一番の成果となったのは第Ⅳ期の遺構である。コの字形配列を示す大形の建物群は、主軸方位を約10度東傾させた状態で規制されている。この主軸の規制要素は、遺跡の東側に拡がる「斜行条里地割」の陌線と考えられ、同地割の開発および管理に関連した施設として今回の検出遺構を理解したい。出土遺物が少ないため、具体的な時期の決定は難しいが、面取の高杯や須恵器の杯の存在から、平安時代前葉の9世紀代と想定した。この年代については今後の調査によって、明かなものに近付けられよう。



第33図 埋塚遺跡と斜行条里

検出した遺構の性格としては、「東大寺領坂田郡息長庄」が候補の1つに挙げられる。

さらに第IV期の建物群が廃絶した後、遺跡西方に拡がる統一条里の規制を受けて当該地に第IV期の建物群が構築される。関連遺構の出土遺物から、この画期は平安時代末葉の12世紀後半と想定される。

以上までに述べたとおり、埋塚遺跡の複合遺構を明かにすることで、天野川右岸の開発過程を知る良好な資料を得ることができた。これらの資料が今後の調査によって一層充実したものになることが願われる。

なお末筆になったが、調査に際して御協力をいただいた方に、深く謝意を表する次第である。

図 版



埋塚遺跡全景



調査前現況



調査風景



試掘第28トレンチ



試掘第28トレンチ



調査風景



調査風景



第5 トレンチ空中写真



SB02



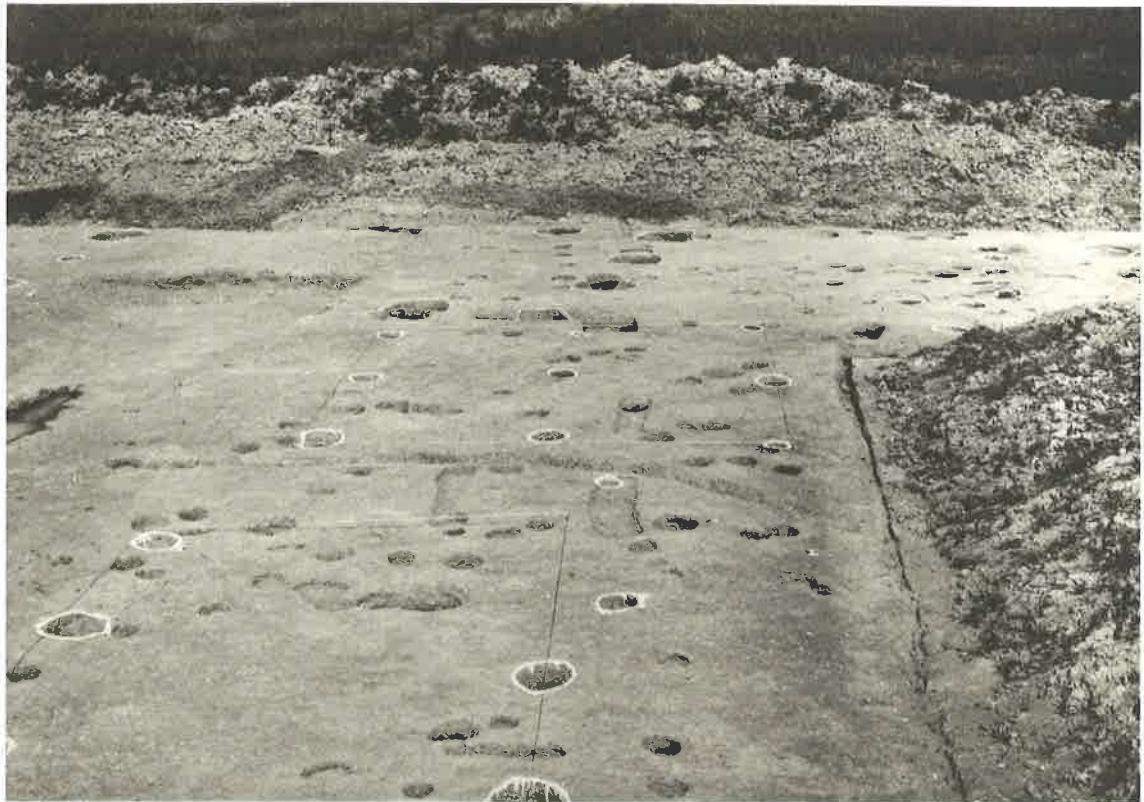
SB01



SB12



SB06



SB10



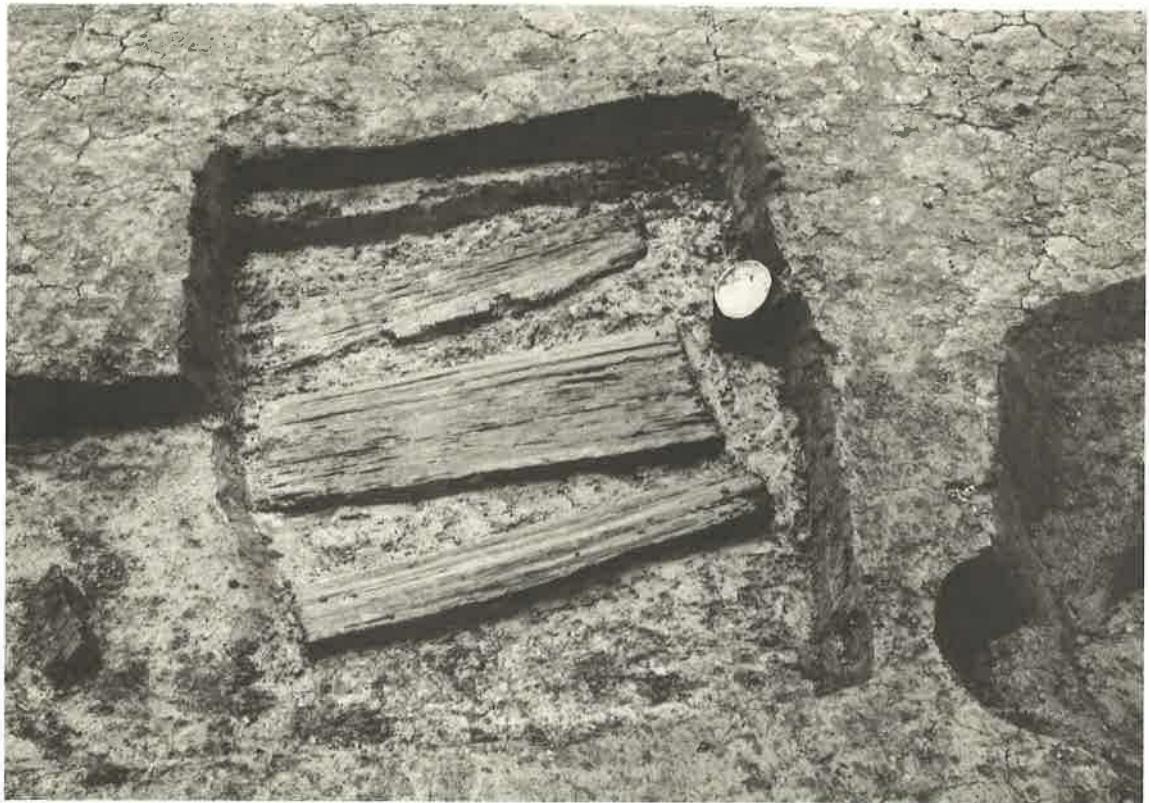
SB10



柱穴遺存狀況



柱穴遺存狀況



SX01



SK01



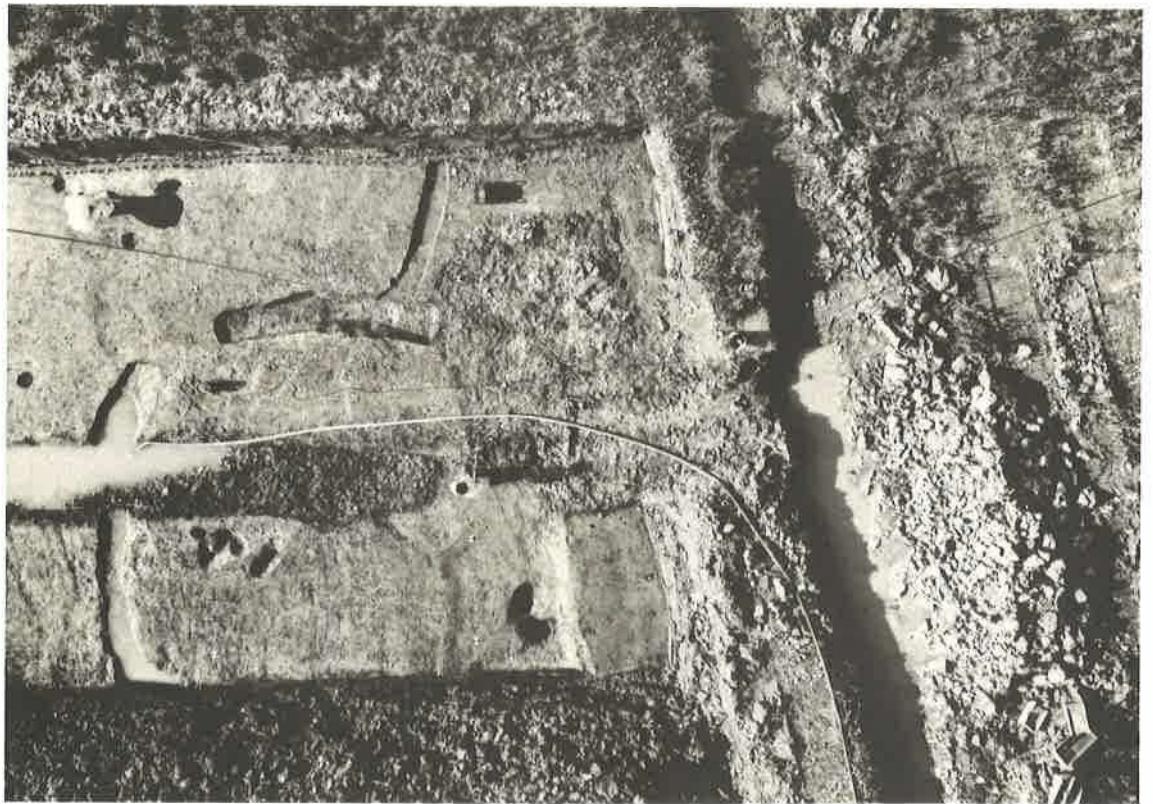
第5トレンチ



SB06



第8トレンチ



SX03



1



6



5



2



12



9



7



8

出土遗物



13



4



10



11



16



67



17



19



35



41



40



39



42



43



44



131



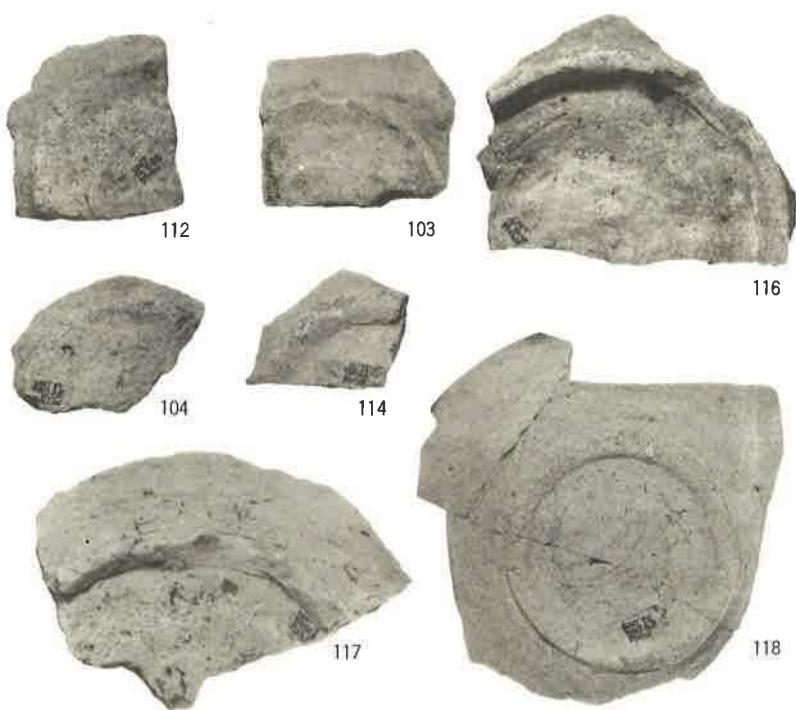
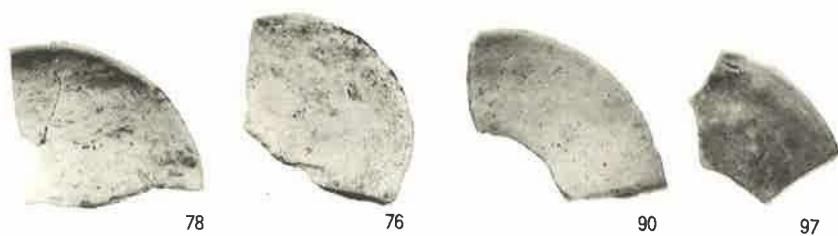
129



128



132



出土遺物



—



60



72



141



142



51



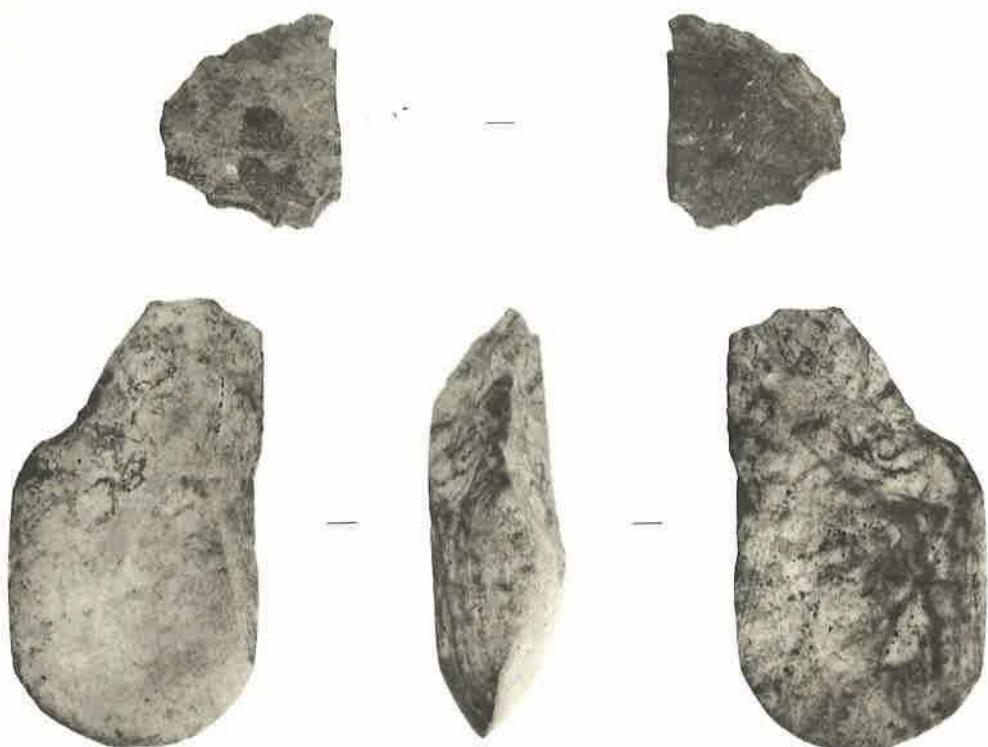
28



74



74



2



1

3

出土遺物

近江町文化財調査報告書第9集

埋塚遺跡2

1991年3月

編集行 滋賀県坂田郡近江町教育委員会

印刷 有限会社 真陽社